

磐越自動車道関係発掘調査報告書

うえ こ じま 遺 跡

1996

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

磐越自動車道関係発掘調査報告書

うえ こ じま 遺 跡
上 小 島 遺 跡

1996

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

平成9年度に全線開通予定の磐越自動車道は、会津坂下・安田間の工事を残すのみですが、開通後は太平洋側と日本海側を結ぶ一大動脈として、沿線地域を中心とした経済・文化活動に多大な役割を果たすものと期待されています。

磐越自動車道の通過する地域には、旧石器時代から近世にかけての数多くの遺跡が所在しております、道路法線に係るものについてはこれまでに発掘調査を実施し、多くの貴重な成果を得ています。

今回調査を実施した上小島遺跡では、縄文時代早期最終末の縄文条痕系土器が比較的まとまって出土しています。この時期の土器は新潟県では出土例が少なく、福島県内の遺跡で多く出土していることから、今後これらの資料との比較検討を実施していく中で、縄文時代早期終末期の土器様相や文化の伝播経路などが明らかにされるものと期待されます。

これらの調査成果が、今後の縄文時代研究の資料として活用されると共に、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、発掘調査に際して多大なご協力とご援助を賜りました上川村教育委員会並びに地元の方々、また調査から報告書刊行に至るまで格別のご配慮を賜った日本道路公団新潟建設局・同津川工事事務所に対し、深甚なる謝意を表します。

平成8年11月

新潟県教育委員会

教育長 平野清明

例　　言

- 1 本報告書は新潟県東蒲原郡上川村大字小出字上小島920番地ほかに所在する上小島遺跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は磐越自動車道建設に伴い、新潟県が日本道路公団から受託した。
- 3 発掘調査は調査主体である新潟県教育委員会（以下、県教委と略す）が、財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団と略す）に調査を委託し、平成7年度に実施した。
- 4 整理作業および報告書の作成にかかる作業は平成7年度に実施し、埋文事業団職員がこれにあたった。
- 5 出土遺物と調査にかかる資料はすべて県教委が保管している。遺物の注記号は上小島遺跡を示す「上小」とし、出土地点、層位、遺物番号、遺構名などをそれぞれに併記した。
- 6 遺物番号は通し番号とし、本文・一覧表・実測図・写真の番号は一致している。
- 7 土器の断面図の網目は、胎土に繊維を含んでいることを表している。また、石器の使用痕については種類ごとに異なる網目で表示し、各図版に凡例を付した。
- 8 本書で示す方位はすべて真北である。磁北は真北から7度20分西偏している。作成した図面のうち、既成の図面を使用したものについては、それぞれにその出典を記した。
- 9 引用文献は著者および発行年（西暦）を中心に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 10 本書は藤巻正信（埋文事業団調査課調査第一係長）の指導のもとに、南雄二（同文化財調査員）、内山徹（同文化財調査員）、島田昌幸（同文化財調査員）が分担執筆した。分担は、第II章と第III章5-B-1(1)・(2)が島田、第III章5-B-(1)～(10)が内山、この他が南である。なお、石材の同定は藤巻が行い、第III章6は古環境研究所に委託した。編集は南が行った。
- 11 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示・助言をいただいた。厚く御礼申し上げる。（敬称略、五十音順）
遠藤佐、鹿嶺町教育委員会、上川村教育委員会、津川町教育委員会、三川村教育委員会

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査体制と整理作業	2
A 調査体制	2
B 整理作業	3
第Ⅱ章 遺跡の環境	4
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	5
A 周辺の遺跡	5
B 古代・中近世の東蒲原郡	8
第Ⅲ章 上小島遺跡	9
1 一次調査	9
2 二次調査	10
A 調査方法	10
B 調査の経過	11
3 層序と遺物の出土状況	12
A 層序	12
B 遺物の出土状況	12
4 遺構	15
A 分布と構築年代	15
B 各説	15
5 遺物	16
A 土器	17
B 石器	23
6 自然科学的分析	32
1. 試料と方法	32
2. 測定結果	32

第IV章	調査の成果とまとめ	33
1	日向B期とI群1類土器	33
2	日向B期とI群2・3類土器との関係	35
3	新潟県における出土例	35
《要 約》		37
《引用・参考文献》		38

挿 図 目 次

第1図 位置と周辺の遺跡	6	第10図 石器種別出土分布図(1)	23
第2図 一次調査位置図	9	第11図 石器種別出土分布図(2)	24
第3図 グリッド設定図	10	第12図 不定形石器分類別割合	25
第4図 調査範囲区分図	11	第13図 不定形石器分類別出土分布図	25
第5図 調査風景	11	第14図 磨石類長幅分布図	27
第6図 土層柱状図	13	第15図 剝片類出土分布図	28
第7図 遺物出土分布図	14	第16図 日向南B期の土器とI群1類土器	34
第8図 出土遺物と土器の構成比	17	第17図 I群2・3類土器と福島県出土土器	36
第9図 群別土器出土分布図	20	第18図 関連遺跡位置図	36

表 目 次

第1表 周辺的主要遺跡一覧	7	第6表 剝片類分類別出土数	28
第2表 胎土と文様の関係	19	第7表 剝片類石材別出土点数	29
第3表 土器観察表	21	第8表 剝片類分類別石材表	29
第4表 石器種別出土点数	23	第9表 石器観察表	30
第5表 不定形石器分類別石材表	26	第10表 関連遺跡一覧	36

図 版 目 次

図 面

- 図版1 遺構全体図(1:800)
図版2 遺構個別実測図
図版3 土器実測図1(1~22)
図版4 土器実測図2(23~51)
図版5 石器実測図1(1~15)
図版6 石器実測図2(16~23)
図版7 石器実測図3(24~36)

写 真

- 図版14 遺跡遠景、遺跡全景、遺物出土状況、基
本層序
図版15 SK1・SK2・SX3・SK4・SX

- 図版8 石器実測図4(37~45)
図版9 石器実測図5(46~56)
図版10 石器実測図6(57~65)
図版11 石器実測図7(66~74)
図版12 石器実測図8(75~80)
図版13 石器実測図9(81~82)

5の土層断面と完掘状況

- 図版16 SK6・SK7の土層断面と完掘状況、
1号集土坑の検出と土層断面、遺跡完

掘状况

- 图版17 第Ⅰ群1・2類土器(1~25)
图版18 第Ⅰ~Ⅲ群土器(26~51)、石鎚、石錐、
石匙、箒状石器(1~14)
图版19 簸状石器、打製石斧、磨製石斧(15~24)

图版20 不定形石器(25~42)

图版21 不定形石器、石錐(43~55)

图版22 磨石類、石皿(56~66)

图版23 剝片類(67~76)

图版24 剝片類、石核(77~82)

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯

磐越自動車道は、福島県いわき市を起点として常磐自動車道から分岐し、郡山市で東北縦貫自動車道と連結、さらに会津若松市・新潟県東蒲原郡津川町を経て新潟市で北陸自動車道と結ばれる総延長212kmの高速道路である。太平洋側と日本海側の生活圏を直結させるこの高速道路は、沿線地域の産業・経済・文化の交流を促進させる重要な役割を担っている。

基本計画

磐越自動車道のうち、上小島遺跡のかかる区間（会津坂下～津川間）は延長約33.2kmを測る。全線の最後を飾ることの区間の施工命令（第10次施工命令）が建設大臣から出されたのは、昭和63年1月のことである。これを受けた日本道路公団新潟建設局（以下公団と略す）は、同年3月に路線を発表し、本格的に道路建設に向けての準備を始めた。なお、工事の施工命令に先立つ基本計画は昭和53年12月に決定され、途中建設省による調査・調整期間を挟んで整備計画は昭和61年1月に決定されている。平成元年11月、公団は県教委に県境～津川間（13.8km）の法線内全域の埋蔵文化財包蔵地の分布調査を依頼した。県教委はこれを受けてその月に調査を実施し、No53（上小島遺跡）を含む13地点について一次調査の必要性と各地点の調査対象面積を公団に回答した。

一次調査

公団と県教委は分布調査の結果と工事工程をふまえて協議を行った。その結果、津川～安田間の29地点の一次調査が全て終わり次第、この区間の第一次調査にはいることとなった。

No53地点の一次調査は平成4年1月と8月、さらに平成6年7月の3回にわたり実施した。平成4年1月は県教委が、平成4年8月と平成6年は県教委から委託を受けた埋文事業団がこれを行っている。この結果、多くの縄文時代の遺物・遺構を検出し、二次調査が必要であることが判明した。県教委はこのことを公団に通知するとともに、名称を上小島遺跡と改め、文化庁に遺跡の発見通知を提出した。

二次調査

公団と県教委は調査工程の協議を重ね、上小島遺跡の二次調査は平成7年度に実施することに決定した。二次調査面積は6,100m²であり、県教委から委託を受けた埋文事業団がこの調査にあたった。なお、磐越自動車道の建設に伴う県境～津川間の二次調査は平成5年度に始まり、平成7年度に終了した。この区間の遺跡は、津川よりから北野遺跡（平成5・6・7年度調査）、七堀道下遺跡（平成6・7年度調査）、上小島遺跡（平成7年度調査）の計3遺跡で、発掘調査総面積は31,200m²に及ぶ。

2 調査体制と整理作業

A 調査体制

発掘調査は新潟県教育委員会が主体となり、下記の体制で実施した。

[一次調査]

平成3年度

調査期間 平成4年1月17日～1月21日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 横川 徹夫）

管 理 大島 圭己（新潟県教育庁文化行政課長）

吉倉 長幸（ “ 課長補佐）

調査指導 横山 勝栄（ “ 埋蔵文化財第一係長）

本間 信昭（ “ 埋蔵文化財第二係長）

調査担当 北村 亮（ “ 主任）

調査職員 平澤 秀昭（ “ 文化財主事）

庶 務 藤田 守彦（ “ 文化財主事）

平成4年度

調査期間 平成4年8月4日～8月6日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）

管 理 藍原 直木（専務理事・事務局長）

渡辺 耕吉（総務課長）

茂田井信彦（調査課長）

調査指導 戸根与八郎（調査課調査第一係長）

調査担当 北村 亮（ “ 主任）

調査職員 阿部 雄生（ “ 専門員）

庶 務 藤田 守彦（総務課主事）

平成6年度

調査主体・調査・管理は平成4年度と同じ

調査期間 平成6年7月18日～7月22日

調査指導 藤巻 正信（調査課調査第一係長）

調査担当 高橋 保雄（ “ 主任調査員）

庶 務 泉田 誠（総務課主事）

[二次調査]

調査期間 平成7年4月12日～8月29日
 調査主体 新潟県教育委員会（教育長 平野 清明）
 調査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 平野 清明）
 管理 藍原 直木（専務理事・事務局長）
 山上 利雄（総務課長）
 亀井 功（調査課長）
 調査指導 藤巻 正信（調査課調査第一係長）
 調査担当 南 雄二（文化財調査員）
 調査職員 内山 徹（文化財調査員）
 底務 泉田 誠（総務課主事）

B 整理作業

(1) 遺物の取り扱い

水洗 原則として発掘調査と並行して現場内で行った。土器については、風化が進んでいる上にもろい物が多くだったので、2～3日陰干しをした上で洗った。また、注記終了後すべてにバインダー処理も施した。

注記 現場作業終了後、大半は埋文事業団曾和分室において行った。その際大型の注記専用の機械を使い効率化を図った。ただし、機械で注記しづらい物や機械の黒色インクでは注記が見えにくい物に関しては、これまでどおり手作業で白色ポスター色や墨汁を使い分けて注記した。手作業で注記した石器や、ポスター色で注記した土器には、すべて文字上にニスを塗布した。

復元 土器は時期別や器形・個体別に分類後、接合を試みた。また、実測・観察終了後の保存や写真撮影を考慮して、1点だけ石膏復元を行った。石器も製作過程の復元を試みたが、接合資料となる物は見つからなかった。

(2) 経過と体制

本格的に整理作業に入ったのは平成7年12月からである。この時点で遺物の水洗・注記や図面・写真的基礎整理はほとんど終わっていたので、遺物の分類から着手した。分類後、実測・トレースに入り、図版は3月初めにできあがった。この他、写真撮影や必要な挿図作りも実測・トレースと並行して行い、本文執筆にかかったのは2月半ばからである。これらの整理作業は南を中心に内山、島田と埋文事業団日々雇用職員があたった。石材の同定は藤巻が行った。

整理期間 平成7年12月1日～平成8年3月31日
 主体 新潟県教育委員会（教育長 平野 清明）
 調査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 平野 清明）

第II章 遺跡の環境

上小島遺跡は、新潟県の東部、福島県境に程近い、東蒲原郡上川村大字小出字上小島920番地ほかに所在する。

上川村は、津川町、鹿瀬町、三川村と共に東蒲原郡に属し、北は津川町、西は三川村・中蒲原郡村松町・南蒲原郡下田村、南及び東は福島県と接する。村の総面積は361.13km²と郡内一を誇り、その97%が林野で、南側には越後山脈が走る典型的な山村である。人口は3,607人で、人口密度については新潟県全体が196.8人/km²であるのに対し、上川村は9.9人/km²と極めて低い(平成6年4月1日現在)。村内を阿賀野川の支流である常浪川が北流し、常浪川及びその支流の東小出川、柴倉川等に沿って26か所に及ぶ縄文時代の遺跡が分布している(平成7年11月現在)。常浪川流域の遺跡は、八田^{やた}地区より下流の遺跡群と上流の遺跡群とに分けられ、前者は主に縄文時代前期末葉～晩期、上流には縄文時代草創期～前期に属する〔遠藤1995〕。

1 地理的環境

東蒲原郡を含む本県東部の山間部は、朝日山地・飯豊山地・越後山脈・三国山脈など、2,000m級の起伏が大きく急峻な地域を主とする[新潟県1986]。この山間部を横切って、流長約210km、流域面積約7,710km²、北日本屈指の大河阿賀野川が西流し、多くの支流と共に海岸や山間の盆地に大小の沖積平野を形成している。阿賀野川は福島県と栃木県境の荒海山(標高1,580m)を水源とし、会津盆地で大川、只見川と合流、蛇行しながら新潟県へと流れる。本県に入ると北に飯豊山地、南に越後山脈を望みながら、津川町で常浪川と、三川村で新谷川と合流する。さらに蒲原平野では早出川と合流、川幅を広げながら広大な水田地帯を潤しつつ北流し、日本海へと注ぐ。

阿賀野川の支流常浪川は、津川町を約3km遡った所で東小出川と、さらに上流へ約4km遡った所で柴倉川と合流する。この付近までの両岸周域には、幅0.5km~1km前後の越後津川層の洪積土上に狭い沖積層の水田帯が見られる。さらに約5km遡り上川村柄郷地区付近で笠倉山(標高1,140m)から流れ出る広谷川と合流し、この付近から川は渓流となる。

常浪川が柴倉川を合流する辺りから上流の県境水源帯までの約25kmは室谷川と呼ばれ、サケ・マス・アユ・ハヤ・イワナ・ヤマメなど河川の恵みのはか、薪炭の原料となる材木や良質な山菜など周囲の山林からの恵みも豊かである[中村1960]。しかしこの辺りは山裾が川岸まで迫るため耕地は狭く、水田は室谷川が作った狭帯状の小斜面で点々と営まれている。

常浪川の支流東小出川は上小島遺跡南東の戸屋山(標高581.2m)の麓に源を発し、両岸に小さな段丘を形成しながら北流、国道49号線常浪橋のたもとで常浪川と合流する。

上小島遺跡は、東小出川左岸の段丘面に位置し、常浪川と東小出川との合流点から南南東へ直線距離で約4.8km、標高はおよそ120mである。現河床との比高は25~30mで、東西約230m、南北約80mの規模を有する北向きの平坦面に立地する。調査以前は全域山林で、過去に遺物の採集された記録はない。また、本遺跡は戸屋山から延びる尾根の尖端部にあたり、遺跡の中央が緩やかに盛り上がった形状となっている。

東小出川を挟んで対岸の台地上、下小島遺跡からは縄文時代後期の遺物が出土している。

2 歴史的環境

A 周辺の遺跡

東蒲原地方の遺跡分布状況を見ると、いずれも阿賀野川及びその支流に作られた河岸段丘上に立地し、その多くは縄文時代中期から後期にかけての遺跡である。しかし、近年の磐越自動車道の建設に伴う埋蔵文化財の調査で、旧石器時代や縄文時代草創期・早期の遺物を含む遺跡も発掘されており、県内でも類例の少ない貴重な資料が良好な状態で出土している。

旧石器時代では三川村上ノ平遺跡(3)、吉ヶ沢遺跡(2)、鹿瀬町角井A遺跡^{2005年}等があげられる。上ノ平遺跡のA地点では5つのブロック（遺物集中地点）から杉久保型ナイフ形石器、神山型彫刻刀形石器などが出土した〔沢田・飯坂ほか1994〕。また上ノ平遺跡C地点、吉ヶ沢遺跡でも、旧石器時代のブロックが確認されている。トゥールの割合が高い上ノ平遺跡、石刃・石刃石核・剣片等の割合が高い吉ヶ沢遺跡の調査結果は、石刃技法による組織的な石器製作技術を解明するうえで重要な資料となっている〔沢田1994〕。

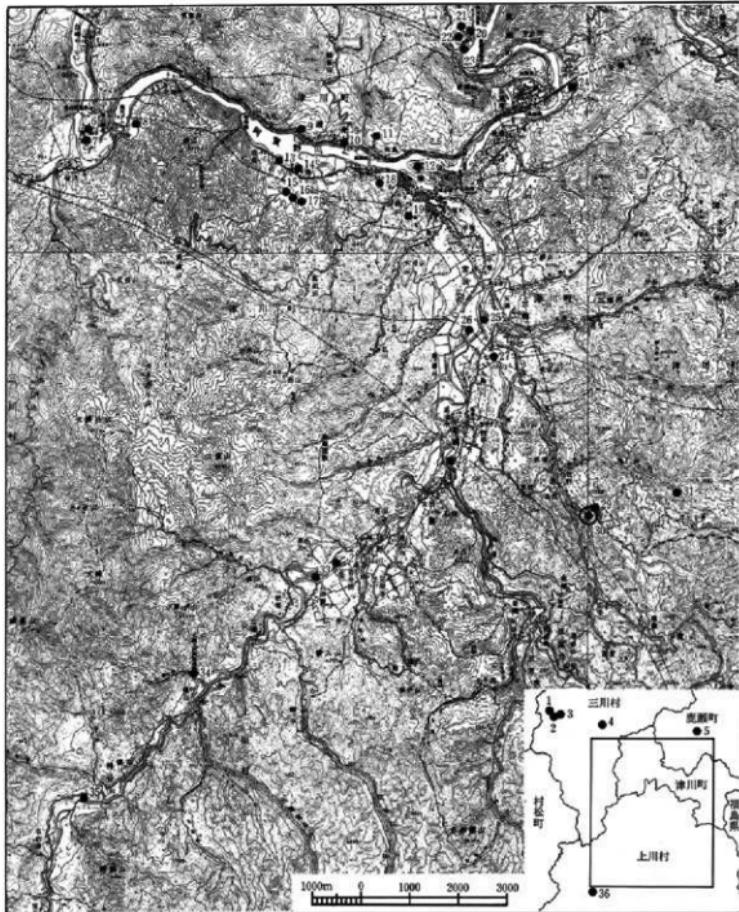
縄文時代草創期・早期では、今回報告を行う上川村上小島遺跡^{2005年}のほか、常浪川上流部にある小瀬ヶ沢洞窟³⁰と室谷洞窟³⁰があげられる。上小島遺跡では早期終末に比定される土器が出土している。小瀬ヶ沢洞窟と室谷洞窟は全国的に有名で、国の史跡に指定されている。小瀬ヶ沢洞窟からは微隆起線文・爪形文・多縄文等が施された土器や、石鏃・尖頭器・搔器等の石器類が数多く出土している〔中村1960〕。室谷洞窟からは7個体分の人骨のほか縄文時代草創期から弥生時代に至るまでの多くの遺物が出土しており〔中村1962〕、小瀬ヶ沢洞窟と共にこの地方の先史文化を雄弁に物語っている。また、常浪川ダムの建設に伴い、平成6年度から上川村教育委員会によって大谷原遺跡²⁰の発掘調査が行われている。同遺跡では縄文時代早期中葉の住居跡や土器など県内でも類例の少ない貴重な資料が出土しており〔遠藤1995〕、今後の調査結果が期待される。

縄文時代前期では、津川町中棚遺跡³⁰・猿額遺跡⁰⁶・上川村北野遺跡²⁰等があげられる。猿額遺跡では、東北南部系の大木5・6式の土器群がまとまって出土している〔滝沢ほか1995〕。常浪川下流の北野遺跡では、福島県金山町の沼沢火山の火碎流による二次堆積物層が遺物包含層を上層と下層に2分しており、特に下層からは前期後葉から末葉にかけての集落跡やそれに伴う数多くの遺物が、集落廃絶時に近い状態で検出されている〔高橋1995〕。また、周堤を伴う大型窪穴住居跡や多くの土坑、ゴミ捨て場や広場と思われる場所等、当時の集落を推定するに有効な調査結果が得られており〔高橋1995〕、本報告が待たれる。

縄文時代中期に入ると遺跡数は増加する。津川町大坂上道遺跡⁰⁷で出土した土器には東関東系や北陸系の影響が強く見られ、県内の他の地域には認められない傾向を示している〔滝沢ほか1995〕。津川町原遺跡⁰⁶は中・後・晚期の土器、土偶、石鏃、磨製石斧等、多量の遺物を含む広大な遺跡である。三川村堂田遺跡(1)や鹿瀬町長者屋敷遺跡(5)は、発掘調査は行われていないものの、表面採集資料から推定するに中期以降の大集落である可能性が高い。津川町角井岩陰遺跡^{2005年}からは、原遺跡、長者屋敷遺跡と共に大型の穀石籠が出土しており、阿賀野川流域がサケやマス、その他の魚類を獲得する重要な場であったことを裏付けている〔本間ほか1962〕。前述した上川村北野遺跡では、上層から、縄文時代中期末葉から後期初頭にかけての集落跡が確認されている。これは土坑群を取り巻くように住居跡、炉跡、埋設土器等が配置された形

で、径70~80m前後の環状集落と推定される。また、県内では類例の少ない柄鏡形敷石住居を含む敷石住居や、住居跡に伴う土器埋設複式炉、土器埋設石組炉などが検出された〔南1995〕。他に三川村平野遺跡(6)、新瀬遺跡(8)、津川町六角原遺跡¹¹、宮野遺跡¹⁰、古志王遺跡¹⁰、鹿瀬町角神B遺跡²⁰、角神C遺跡²³、角神D遺跡²³、上川村七堀道下遺跡¹⁰、大屋敷遺跡²⁸、孤薩遺跡²³、揚城遺跡²⁴等があげられる。

後期の遺跡は中期から継続しているもののはかに、三川村牧ノ沢遺跡(7)、津川町大師堂遺跡(9)、楠川遺跡²⁴、鹿瀬町深戸遺跡²⁴、上川村下小島遺跡²⁴がある。深戸遺跡は阿賀野川が大きく湾曲する東岸の台地上に立地し、縄文時代後期前半の所産と考えられる有孔壺形土器が出土している〔赤城ほか1986〕。楠川遺



国土地理院発行 5万分の1「津川」「大日岳」「御神岳」「野沢」を使用 (1/10,000)

第1図 位置と周辺の遺跡

跡および下小島遺跡では偏平梢円状石器が出土しているが、本間氏はこれらを、「骨角器製作用具と言われるもので関東地方の遺跡でしばしば見られるものである。」〔本間ほか1962〕としている。また、前述した大坂上道遺跡からは、約60点のアスファルトを貯蔵した小型深鉢等、全国的に珍しい資料が検出されている〔滝沢ほか1995〕。

晩期の遺跡も中・後期から継続しているものが多い。三川村若宮洞窟遺跡(4)は、阿賀野川の崖上約10mの巨大岩石下にある自然空間部を利用している〔本間ほか1962〕。未調査の部分が多いため出土遺物は少ないが、この地方に多い洞窟遺跡の実態を解明するためにも本格的な調査が待たれる。上川村入道岩洞窟遺跡(8)は、滝沢川に南面した傾斜地に位置し、巨岩の裂け目を利用して土器片のほか、多量の獸骨片が出土している〔本間ほか1962〕。

弥生時代以降の遺物は、いくつかの遺跡の上層部からわずかに検出されるのみである。津川城跡(9)と御小屋館跡(10)は中世の遺跡として確認されている。津川城は建長4(1252)年、蘆名氏一族の藤倉盛弘(のち金上氏)が築城し、「新編会津風土記」によれば、「東は石壁が高く孤も引き返す」ほどであることから、孤^{きつ}戻^{もど}城^{じょう}と呼ばれた。御小屋館跡は、大治2(1522)年、吉見亮之が創築した。天正年中(1573~92)には、上杉景勝が野陣したと言う〔赤城1986〕。

東蒲原郡の遺跡を概観すると、各遺跡が河川に沿って立地していることや、遺物に東北・関東系のものが含まれることから、古代においても河川による交通や文化の交流が盛んであったことがうかがえる。しかし、本間氏によれば「縄文時代後期頃までは時期・地域・遺物によっては、時として関東の要素が強く反映し、時には東北の要素が強く影響したもので、いずれかの文化が一方的に強く支配したというような結論は下されない。」〔本間ほか1962〕のである。いずれにしても、東蒲原郡は東北・関東・北陸の文化が融合した地域として注目すべき点が多いが、惜しむらくは本格的な調査が行われた遺跡がまだ少ないと

No	遺跡名	時期	No	遺跡名	時期
1	堂田	縄文(中・晚期)	19	古志王	縄文(中期)
2	吉ヶ沢	旧石器・縄文(前期)	20	角神A	旧石器
3	上ノ平	旧石器・縄文(後期)・平安	21	角神B	縄文(中期)
4	若宮洞窟	縄文(晚期)	22	角神C	縄文(中期)
5	長者屋敷	縄文(中・後・晚期)	23	角神D	縄文(中期)
6	平野	縄文(中期)	24	深戸	縄文(後期)
7	牧ノ沢	縄文(後・晚期)	25	楠川	縄文(後期)
8	新瀬	縄文(中・後期)	26	北野	縄文(前・中・後・晚期)
9	大師堂	縄文(後期)	27	七堀道下	縄文(中・後期)
10	原	縄文(中・晚期)	28	大屋敷	縄文(中・後・晚期)
11	角崎岩陰	縄文(中・後・晚期)・平安	29	下小島	縄文(後期)
12	津川城跡	中世	30	上小島	縄文(早・前期)
13	六角原	縄文(中期)・平安	31	入道岩洞窟	縄文(晚期)・弥生
14	宮野	縄文(中・後期)	32	孤窪	縄文(中・後・晚期)
15	中畠	縄文(前・中・晚期)	33	揚城	縄文(中・後・晚期)
16	號額	縄文(前・中期)	34	小瀬ヶ沢洞窟	縄文(草創期)
17	大坂上道	縄文(中・後期)・平安	35	大谷原	縄文(早・前期)
18	御小屋館跡	中世	36	室谷洞窟	縄文(草創・早・前・中・後・晚期)・弥生

第1表 周辺の主要遺跡一覧

う点である。山間、豪雪地という苛酷な条件下で他地域との交流を積極的に行ってきた先人の生活が、今後一層明らかにされることが望まれる。

B 古代・中近世の東蒲原郡

(1) 東蒲原郡と小川庄

東蒲原郡は、幕末までそのほぼ全域が小川庄と呼ばれ、越後国蒲原郡でありながら、明治初年の一時期を除いて明治19（1886）年まで長く会津領主の支配下にあった。それは承安2（1172）年、越後を支配下においた城長茂が叔母を会津津恵日寺の僧^{えいじ}兼丹坊^{けんたんぼう}に嫁^{じよ}がせ小川庄を寄進して以来のことである。

会津の支配下におかれた小川庄は、中世に入ると会津四家のうちの山内氏の所領となるが、天文12（1543）年、山内氏が同じく会津四家の蘆名氏に服属したため、その後は蘆名氏の所領となった。蘆名氏は小川庄赤谷（現新発田市赤谷）の小田切氏を抱え、前項で触れた津川孤戻城には分家の金上氏を置き、両氏を越後対策に充てた。しかし戦国期、上杉の脅威に小田切氏が遠ざかり、天正17（1589）年、摺上原（現磐梯町）の決戦では伊達政宗に大敗、結果として小川庄も伊達政宗の支配を受けることになる。この頃から領主が次々と交替し不安定な時期が続くが、寛永20（1643）年会津松平家の祖として保科正之が領主となり、以後明治維新まで松平の治世が続く〔赤城ほか1986〕。

(2) 東蒲原郡と阿賀野川

近世に入り、津川は阿賀野川水運（津川船道）の川渓、会津街道の宿駅として栄え、会津藩の西の要衝となつた。津川船道は会津藩の管理下、津川町役人と船方仲間により運営された。下り荷は会津藩の稻米の川下げで、上り荷は瀬戸内海産の西入塩が中心であった。全盛期には150艘から250艘前後が稼航していた。明治に入って年貢米の川下げが絶えると、船方は只見川上流の材木を川下げする筏師に変わり、津川は木材の集散地として賑わつた〔関ほか1986〕。

東蒲原郡は津川を中心として長く水陸交通の要地としてその役割を果たしてきた。その要となる阿賀野川の水運は当地においてまさに文化の源であり、多くの支流と共に太古からこの地方の文化を育み、人々の生活を支えてきたのである。

第三章 上小島遺跡

1 一次調査（第2図）

上小島遺跡は一次調査の時点でNa53（小出A）地区と仮称され、調査対象面積は8,150m²であった。第一次調査は第Ⅰ章2にあるように、平成3年度、4年度、6年度の3度にわたり実施した。第1回目の調査は対象地西側半分の内、2,220m²について行った。これは橋脚工事建設における工事方法等の検討資料を得るために、用地未買収で未伐採の杉林の中で行った。このためトレンチは2×2mと小面積に設定せざるを得なく、また調査範囲も工事用道路建設予定地に限られたため、台地全体についての遺跡の構相を判断するには不十分であった。調査の結果、16点の遺物と1基のピットと思われる遺構が検出され、用地買収後の追加確認調査の結果が待たれた。なお、この時点で工事用道路を盛土で仮設したい旨の要望が公団からあり、これを了承した。第2回目の調査は、用地の買取と樹木の伐採が終った対象地西側半分の残り2,600m²について行った。この結果、新たに遺物112点と遺構と思われる落ち込みが3基検出された。このため、この時点での遺跡全体の規模はなお不明であったが、2回にわたる調査の結果からこの地点を新発見の遺跡として周知化した。遺跡名はこの地点の小字名から「上小島遺跡」とした。第3回目の調査は残り東側半分の3,330m²について行った。調査区域は、崖状急斜面を挟んで上部平坦地（1・2回目に統く平坦地）と下部平坦地に区分される。調査の結果遺物17点が検出されたが、下部平坦地は遺物量が希薄であることがわかった。このため上小島遺跡の調査範囲は、下部平坦地を除いた6,100m²に決定した。計3回にわたる調査面積は、対象面積8,150m²に対し450m²（トレンチ数67）で、確認率は5.5%であった。



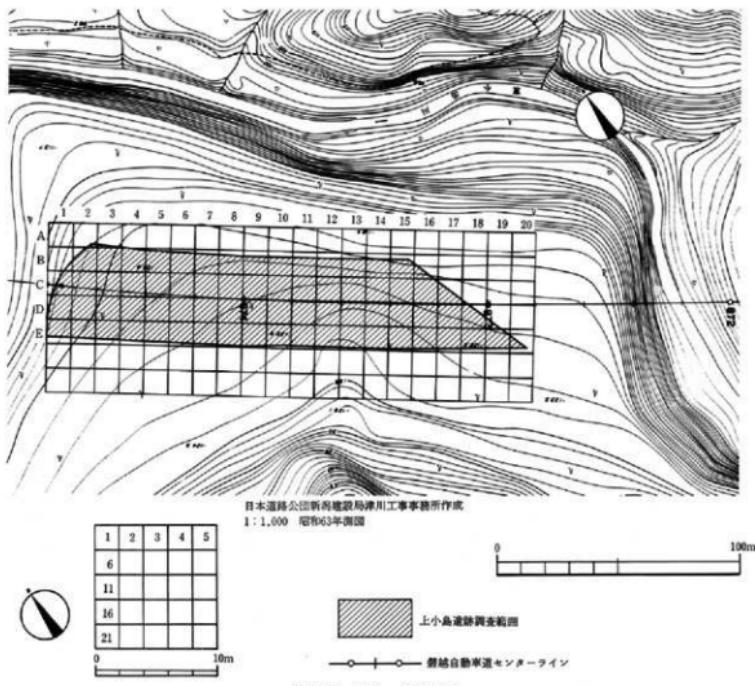
第2図 一次調査位置図

2 二 次 調 査

A 調 査 方 法

(1) グリッドの設定(第3図)

磐越自動車道のセンター杭No873とNo874を結ぶ直線を基準とし、センター杭No874を起点に10mの方眼を組み、これを大グリッドとした。このため、グリッドの長軸方向は真北から54度47分49秒西偏している。大グリッドは長軸方向を算用数字、短軸方向をアルファベットとし、この組み合わせによって表示した。大グリッドはさらに2m四方に分割して1~25の小グリッドとし、7B-7のように表示した。



第3図 グリッド設定図

(2) 調査の基本工程(第4、5図)

調査の基本工程は、基本層序の確認、包含層調査、遺構の精査・発掘である。以下この順で説明する。

基本層序の確認 任意の場所にセクションベルトを残して、一次調査の結果をもとに基本層序を確認した。また、土の堆積状況を図面や写真で記録した。

包含層調査 一次調査の結果から、調査範囲内では遺物が集中して出土する場所と散在する場所が予想で

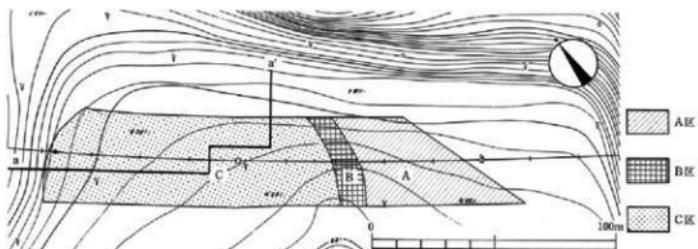
きた。そこで、二次調査では場所により包含層調査の方法を変えて実施することとした。具体的には、遺物出土量が希薄な第4図C区のa-a'より南側では、重機を用いた慎重な包含層調査(第5図左)、遺物が集中するa-a'より北側では、重機による表土除去後の手作業による包含層調査(第5図右)である。包含層調査中出土した遺物は、重機の場合は小グリッドと層位を記録して取り上げ、手作業の場合は一点ごとの地点とレベル値および層位を記録して取り上げた。

遺構精査・発掘 包含層削平後、遺構精査を行った。検出した遺構は、断面観察をした後に掘りあげた。なおこの際、断面・完掘写真撮影と縮尺1/10の断面・平面図を作成した。

B 調査の経過(第4図)

遺跡の両端部は磐越自動車道の橋脚建設が予定されていたため、工事工程上の理由で公団から調査を進める上での要望があった。その内容は、すでに仮設されていた工事用道路部分の調査を優先させ、次に工事用道路の東側部分に着手するというものであった。そこで調査区をA-Cに三区分して調査を進めることした。

調査は4月12日に着手し、重機によって表土除去と包含層調査を始めた。17日からは手作業による遺構精査と遺構発掘に入った。工事用道路部分であるB区(400m²)が終了したのは翌5月9日、A区(1,400m²)が終了したのは31日である。A区終了と前後して、5月29日からC区(4,300m²)で重機による表土と包含層除去を始めた。6月に入ると、工事用道路復旧やこの下を通るベルコン通路の建設が始まり(土捨て場がA区南東側にしかなかったため)、調査に少なからず支障があった。その後、近年にない長雨と大雨に見



第4図 調査範囲区分図



第5図 調査風景(左:重機 右:手作業)

舞われたものの、調査は予定通りに進み、8月29日にすべてを終了した。

3 層序と遺物の出土状況

A 層序（第6図、図版14）

本遺跡の調査範囲は、東西約200m、南北約40mにわたる。現地表の標高は121m～123mを測り、若干の起伏はあるものの、おおむね東から西へ緩やかに傾斜している。このような地形における遺構確認面までの土の堆積は計7つに分層されるが、必ずしも一定しているといえない。表土であるI層と縄文時代の遺物包含層であるII層は調査区全体に堆積しているが、IIIa、IIIb、IV層の堆積が場所により限られているのである。IIIa、IIIb層の堆積は、遺跡の南側斜面の崩落が要因として考えられる。IV層の堆積は、自然流路もしくは沢地が存在していたことが要因と考えられる。なおこの自然流路もしくは沢地は、現地形からもその姿をうかがい知ることができる。

基本層序は以下の通りである。

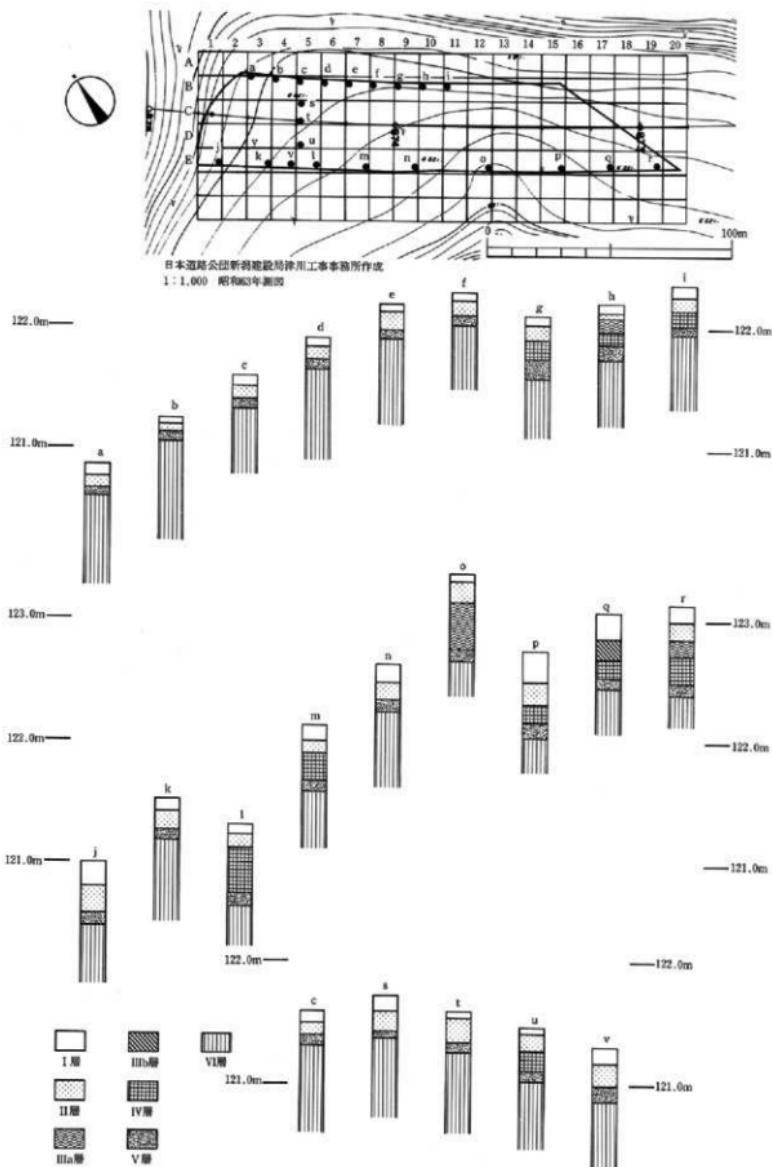
- I 層：暗褐色を呈する表土で、約10～20cmを測る。
- II 層：基本的に暗褐色土でI層より明るいが、IV層が堆積しているところでは黒褐色に近くなりIV層との区別が困難である。縄文時代の遺物包含層で、約10～20cmを測る。
- IIIa層：暗褐色を呈する層で、II層より明るい。遺跡の南側斜面からの崩落による堆積と考えらる層である。黄色の泥岩粒が少量混ざり、厚いところでは40cm程堆積している。
- IIIb層：黄褐色を呈する層で、IIIa層と同様に崩落による堆積と考えられる。黄色の泥岩粒が多く混ざり、厚いところで20cm程堆積している。
- IV 層：黒褐色を呈する層である。自然流路もしくは沢地、あるいは窪地に堆積した土で、約20～40cmを測る。この層のおおむね上面から、流れ込みもしくは投げ込みと思われる縄文時代の遺物が出土する。
- V 層：黄茶褐色を呈するIV層とVI層との漸移層で、層厚は5～15cmである。場所によっては礫や小石、砂を多く含む、この層の堆積時に何度か洪水をかぶっていることが推測される。
- VI 層：明黄褐色を呈するシルトと粘土の互層となる段丘構成層である。礫や小石、砂などが多く混ざる場所もみられる。本層より下は旧河床となる砾層があり、その下は岩盤へと続く。この層の上面が遺構確認面となる。

B 遺物の出土状況（第7図、図版14）

本遺跡の遺物出土総点数は、土器・石器合わせて1,231点に及ぶ。この内遺構に伴うものはごくわずかで、その大半は遺物包含層からの出土である。この項では、遺物包含層からの出土に若干の特色があるので概観する。

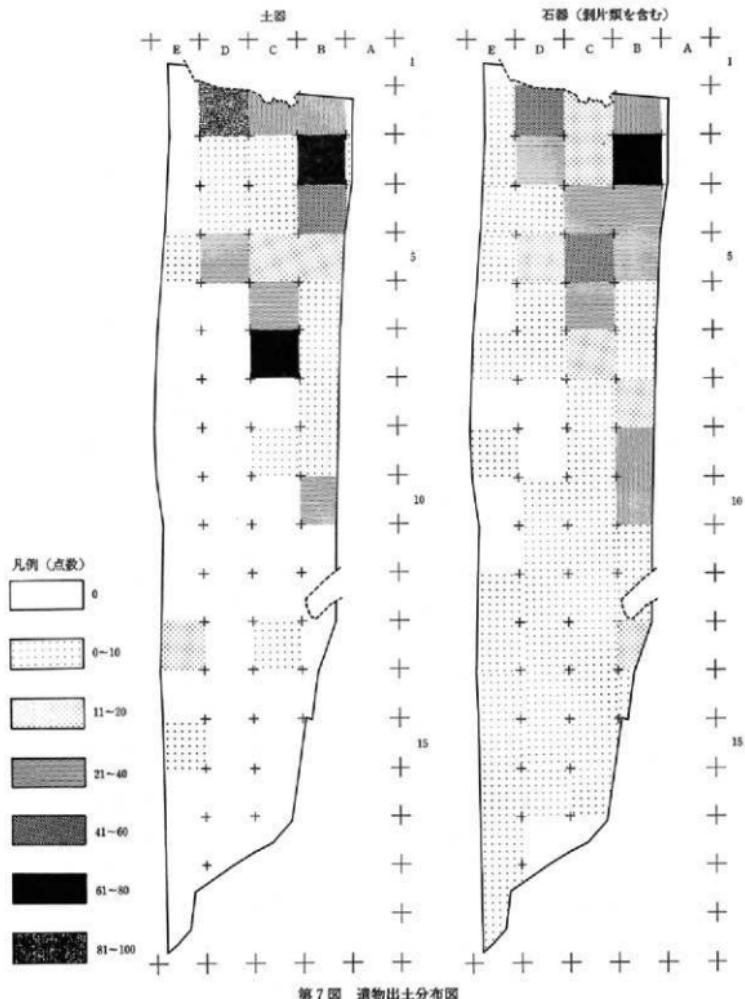
遺物の出土分布図（第7図）を見ると、石器・土器ともに遺跡の西側から北側にかけて集中して分布している。この集中区をさらに出土層位別にみると、B、C列は主にII層から、D、E列は主にIV層上面から遺物が出土している。前項で述べたようにIV層出土の遺物は流れ込みや投げ込みの可能性が高い。したがって、主な生活区域と推定される範囲はさらに絞り込むことが可能である。つまりそこは2列とB列を

3 層序と遺物の出土状況



第6図 土層柱状図

中心とする、主に遺跡北側の段丘縁部ということになる。なお、本章2Aで述べているように、遺物が集中して出土しているところは手作業で包含層調査を行った場所である。したがって、遺物が散在するところは、重機による若干の見落としがあることを否めない。しかしながら、それを差し引いても一次調査の結果や遺物の出土分布図（第7図）から、明らかに集中区があるといえる。



4 遺構

A 分布と構築年代（図版1、16）

上小島遺跡で検出された遺構はわずかに土坑4基、フ拉斯コ状土坑1基、集石土坑1基、性格不明遺構2基で、住居跡や炉跡・焼土等は見つかっていない。ほとんどは遺跡北側の段丘縁部からの検出であり、位置は3B・Cと5Bグリッドに限られる。分布状況から推察して、調査区からはずれた北東部分には何基かの遺構が存在すると思われる。遺構のうち土器を伴っていたものはSX5のみであり、他は出土していない。したがって、SX5以外は時期を特定できない遺構であるが、覆土の観察や包含層出土土器の分布状況からすれば、縄文時代早期終末のものが多いと考えられる（SK7は縄文時代前期）。覆土は遺物包含層であるII層とよく似た暗褐色を呈し、適度に縮まっており、時期の新しい掘り込み（現地の聞き込みにより明治以降と推測される）や木根等の擾乱によって入り込んだ土とは明らかに相違があった。包含層出土土器は遺構の分布と同様に遺跡北側の段丘縁部に集中しており、ほとんどが縄文時代早期終末のものであったが、縄文時代後期～晩期の土器片も数点出土している。なお、SX5の構築年代は、出土遺物から早期終末と考えられ、SX7は覆土中の炭化物が $55,130 \pm 50$ という ^{14}C 年代の測定値を示していることから、前期に構築されたものと考えられる。

B 各説（図版2、15、16）

(1) 土坑

SK1 5Bグリッドに位置し、約1m東にはフ拉斯コ状のSK7がある。確認面はVI層上面で、残存状況は良好である。平面形はほぼ円形を呈し、長径111cm、短径90cm、深さ35cmである。断面形は、底面がほぼ平坦で壁が垂直に立ち上がる箱形を呈する。覆土は3層に分けられ、自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

SK2 3Bグリッドに位置し、約2m南東には1号集石土坑とSX3がある。確認面はVI層上面で、残存状況は良好である。平面形は梢円形を呈し、長径144cm、短径76cm、深さ14cmである。断面形は皿形で、底面には凹凸が見られる。覆土は単層で、床面上から頁岩を素材とする剝片が1点出土している。プランの上や周辺には撒入跡が多く捨てられており、それらの跡はII層中頃から上面にかけて検出されているため、坑はII層の中頃より下方で掘り込まれた可能性が高い。なお、跡はプランの境界に数点がかかるだけなので、跡が捨てられてからSK2が構築された可能性もある。

SK4 3Cグリッドに位置し、約6m北東にはSK2、SX3、1号集石土坑がある。確認面はVI層上面で、残存状況は一部木根による擾乱を受けているが、おおむね良好である。平面の上端は隅丸方形に近いが、東側が不整である。また、下端は梢円形に近い。大きさは、長径96cm、短径68cm、深さ20cmを測る。断面の底面はほぼ平坦であり、壁面はやや緩く立ち上がった後、途中から遺構の上端までさらに緩くなる。覆土は単層で、SK2の覆土に近似する。遺物は出土していない。

SK6 5Bグリッドに位置し、同グリッドの東方向にはSK1とSK7がある。残存状況は、北側の壁面が木根による擾乱を受けていることを除いては良好である。平面形は梢円形を呈し、長径68cm、短径39cm、深さ23cmである。確認面はVI層上面である。断面形は、底面がほぼ平坦で壁が緩やかに立ち上がる

寸胴なバケツ形である。覆土は単層で、多量の炭化粒と少量の焼土粒を含む。遺物は出土していない。

(2) フラスコ状土坑

S K 7 5 B グリッドに位置し、約 1 m 西側には S K 1 がある。確認面は VI 層上面で、残存状況は極めて良好である。断面形はいわゆるフラスコ形で、上端から下方向にくびれ部があり、そこからさらに下に向かってオーバーハングする。深さは 53 cm を測る。平面形はほぼ円形で、上端で 87 × 74 cm、くびれ部で 60 × 59 cm、オーバーハング部で 105 × 99 cm、下端で 85 × 77 cm である。覆土は 5 つに分層され、5 層には壁面の崩落と考えられる土が混ざる。また、土層観察により自然堆積であることがうかがえる。S K 7 は遺物が出土していないため時期不明であったが、水洗選別によって取り出した覆土中の炭化物は 5,130 ± 50 という ¹⁴C 年代の測定値を示している。

(3) 集石土坑

1 号集石土坑 3 B グリッドに位置し、北から北東方向にかけて S K 2 と S X 3 が並ぶように位置する。確認面は VI 層上面で、残存状況は南側が風倒木によって壊されていることを除いては、良好である。平面形は梢円形を呈し、長径 75 cm (推定)、短径 50 cm、深さ 24 cm である。断面形は有段状で、下段底面は若干傾く。覆土は 2 つに分層される。このうち 1 層からは、数点の礫が並べられたように出土している。これらの礫は、出土レベルが確認面とはほぼ同じであることから、掘形の上ではなく土坑中に人為的に置かれた可能性が高い。なお、これらの礫には被熱した痕跡は見られなかった。2 層は、VI 層が混ざることから人為的に埋められた土である可能性が高い。

(4) 性格不明遺構

S X 3 3 B グリッドに位置し、間近に 1 号集石土坑と S K 2 がある。完全に確認したのは VI 層上面であるが、II 層削平中にうっすらと存在が確認できた。残存状況は良好である。平面形は長梢円形を呈し、南側にテラスを持つ。大きさは長径 469 cm、短径 145 cm、深さ 14 cm である。断面形は皿形で、底面に若干の凹凸が見られる。覆土は単層で、投げ込みと思われる礫が多く出土した。また、これに混じって珪質頁岩の不定形石器 1 点と剝片 2 点が出土している。

S X 5 3 B グリッド北側に位置する。確認面は VI 層上面で、残存状況は良好といえない。原因是、この地点の包含層の薄さと土坑の掘り込みの浅さにある。平面形は梢円形で、中央東側には底面から深さ 15 cm の小穴がある。大きさは長径 217 cm、短径 165 cm、深さ 7 cm を測る。断面形は皿形で、底面は西側に向かって傾斜し凹凸が激しい。覆土は単層で、中からは流紋岩製の剝片 3 点、早期終末の土器片 4 点 (図版 3-1)、後晩期の土器片 1 点が出土している。S X 5 が検出された 3 B グリッドの北側は、特に遺物や礫が集中して出土した地点 (図版 14) である。したがって、包含層削平中に遺構の存在が容易に推察できた。このため、遺物や礫を柱状に残しながら遺構の検出に努め、伴伴関係を把握することを主眼においた調査を行った。その結果、伴伴関係は認められなかった。おそらく遺物や礫は、遺構廃絶時もしくは廃絶後に捨てられたものが大半であろう。

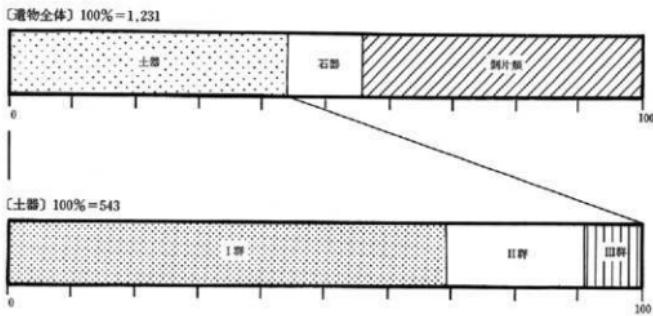
5 遺 物

上小島遺跡では、縄文時代早期終末～晩期に所属する土器・石器が 1,231 点出土した。そのほとんどは遺物包含層出土であり、遺構出土のものは極めて少ない。そこで本節では遺構出土遺物と包含層出土遺物を分けて取り扱うこととせず、所属時期別 (土器)、器種別 (石器) に分類して報告することにする。

A 土器 (図版3、4、17、18)

総数543点の出土土器について、時期別に3群に大別し報告する。

- 第I群土器…………縄文時代早期終末の土器
- 第II群土器…………縄文時代前期初頭～前期中葉の土器
- 第III群土器…………その他の縄文土器



第8図 出土遺物と土器の構成比

(1) 第I群土器 (1~34)

縄文時代早期終末に所属する縄文条痕系の縦維土器を第I群とする。これらの土器のほとんどは遺跡北側の段丘縁部に集中して出土しており、出土点数は372点(全体の68.5%)を数える。I群はさらに文様構成により3つに分類される。なお、文様観察のできない磨耗片や細片も胎土が共通するものはこの群に含めている。

1類土器 (1~24, 26~28)

斜め方向の原体回転により条を縱走させる単節縄文(部位によっては条が斜行する段も見られる)を地文とし、口縁部から胴上半部にかけて沈線を施す土器を本類とする。時期は、東北南部の大畑G式〔馬自原川 山内1975〕に後続する日向B期〔中村1983〕に比定される。日向B期とは、西堂ノ前遺跡(日向B遺跡B地点)〔福島県1964〕出土土器を指標とする土器群が所属する時期である。本遺跡の本類土器の多くに共通する特色は、①浅めの沈線が施される。②地文は0段多条の2段燃りの原体で施されているものが目立つ。③胎土に縦維を含み、褐色系の色調を呈する。④含有物は主に、石英、白色粒子、金雲母であり、中でも本類以外の土器と比べると、金雲母を含むものの割合が高い。⑤極粗砂(Wentworth法による)が多く含まれるため、表面がざらつく。⑥内面に擦痕や条痕は観察されない。等である。

図版3-1は縱走するR L単節縄文を地文として、口縁部に沈線を施す日向B期の典型的な深鉢である。胴部中位には、縱走する縄文の上から斜行する縄文を同一原体によって幅広く施している。沈線は、2本の横位平行沈線を挟んで、下部に連続すると思われる平行の弧状沈線(以下連弧文)、上部に數本ごとに左右の傾きが交互に変わる斜行短沈線が充填される(以下鋸歯文帶)構成をとる。口縁は平縁で、口唇部のキザミは確認できない。器形は胴部がやや膨らみ、口縁部が外反する。底部は見つかっていないが、

胴部の復元から丸底風になるものと思われる。2は、同一個体と思われる破片がこの他に13点ほど出土している。地文は縦走する繩文と思われるが、磨耗が著しいためはっきりしない。口縁部には2本の横位平行沈線が施されている。器形は、胴部がやや膨らみ、口縁にかけてやや外反する。3~7は同一個体と思われる。地文は条が縦走する繩文であるが、原体の詳細はつかめない。口縁部には鋸歯文帯が見られ、口唇部やキザミは確認できない。胴上半部には、5に見られるように横位平行沈線の下に連弧文が施文される。底部は丸底で、胴部と同様に地文が充填されているようである。8・9は同一個体で、条が縦走するLR単節繩文が施文されている。10は孔のある破片で、外側から内側へと穿孔されている。穿孔は土器の焼成前と思われる。8・9と10は出土地点は離れているが、胎土が近似しているため同一個体の可能性がある。11~14は同一個体である。11はやや外反する口縁部の破片である。13は胴部がやや膨らみ口縁にかけて外反する胴上半部破片、14は胴下半部の破片、12は底部近くの破片であると考えられる。13・14には縦走する繩文が観察できる。15~17は遺跡のもっとも北西よりの試掘坑（第2トレンチ=2Cグリッド）からまとめて出土（総点数14）した同一個体の土器である。地文は縦走するRL単節繩文で、節の比較的細かい原体が使われている。15は口唇部にキザミがある。16は口縁部に沈線がある。この2つの破片からでははっきりしないが、おそらく鋸歯文とその上下の横位平行沈線が存在すると思われる。17は上方向に盛り上がる弧状沈線（連弧文？）が施された胴上半部の破片である。なお、鋸歯文帯と上方向の連弧文が同一個体に施文される例は、類例のないものと思われる。18~24は同一個体で、縦走するRL単節繩文を地文とし、その上に沈線が施される深鉢である。文様は、斜行沈線が羽状に構成される。口縁部にはキザミがあり、波状口縁の可能性もある。26、27は文様がはっきりしない厚手の粗製土器である。合計24点程出土しており、ほとんどが27と同一個体になると思われる。この中には条が斜行する繩文が施されたと推定される跡が見えるものや、纖維のヨレともとれるが、沈線が施されたと思われるものもある。26は胴下半部の破片と思われる。2点とも色調が他の1類土器とは異なる赤褐色を呈し、胎土には多量の纖維が含まれる。28は地文を有せず、口縁部から胴上半部にかけて若干深めの沈線が施されている土器片である。文様は、一本の横位平行沈線を挟んで上下に鋸歯文帯が施されるようである。色調は、鈍い橙色（灰褐色の色合いの強い部分もある）を呈し、胎土には纖維、石英、白色粒子を含む。また、極粗砂が少なく、表面が軟質な感じを受ける。これらのこととは（地文がない点も含めて）、他の1類土器とは異なる点である。

2類土器（25・29~31）

条が横走する繩文が施文される繊維土器を2類とする。図示した4点以外は確認していないが、文様観察のできない磨耗片や細片に数点含まれていた可能性がある。25は胴下半部から底部を欠くものの、遺存度の高いものである。色調は茶褐色を呈し、胎土には石英や白色粒子を含むほか、纖維が多量に含まれる。また、1類と同様に極粗砂も多く含まれるため、表面がざらつく。文様は口縁部から胴上半部にかけて条が横走するLR単節繩文を施文し、胴下半部は斜行する繩文を施している。施文原体は同一と思われる。口唇部にはキザミと思われる部分も見られるが、磨耗しているため定かではない。器形は胴部がやや膨らみ、口縁部が若干外反する1類土器と近似する。29~31は同一個体で、薄手の深鉢破片である。29・30が胴部、31が底部近くの破片で、ともに横走するRL単節繩文が施文されている。色調は橙色系で、胎土には石英と白色粒子を含む他、纖維が混じる。25の土器とは違い極粗砂はあまり含まれず、軟質な印象を受ける。

3類土器（32~34）

撚糸文が施文されたものを3類とする。出土したものは、同一個体と思われる尖底部破片3点である。

燃糸文は、若干傾くが、器面に対して縦方向に施される。また、斜め方向に重ねて施される箇所も見える。色調は橙色で、内面の擦痕や条痕は観察されない。胎土には纖維、石英、白色粒子が含まれる。

以上のようにⅠ群土器は文様により三分されるが、胎土によっても明確に二分される。文様と胎土の関係を第2表に示す。

極粗砂	多量に含む		少量含む		
色調	褐色系		橙色系		
出土割合	89.8% (334/372)		10.2% (38/372)		
分類	1類 横走繩文+沈線文	2類 横走繩文	1類 沈線文のみ	2類 横走繩文	3類 燃糸文

第2表 胎土と文様の関係

(2) 第II群土器 (35~43)

繩文時代前期初頭～前期中葉の土器を本群とする。出土点数は123点(全体の22.7%)とⅠ群土器に次いで多いが、3個体分の破片しか出土していない。Ⅱ群はさらに文様構成により2つに分類される。

1類土器 (35~42)

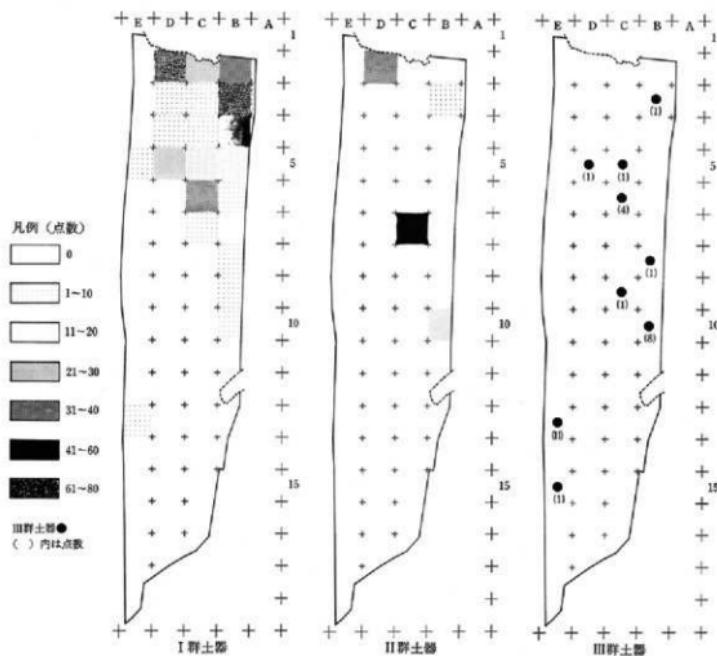
斜行する単節繩文を施す土器を本類とする。35~38は同一個体で、25T(7Cグリッド)からまとめて出土した土器片の一部である。全ての破片を観察する限り、羽状繩文や繩文原体正痕は見られない。文様は全て斜行するR L単節繩文のようである。35は口唇部にキザミが施された口縁部破片で、若干聞き気味に立ち上がる。36は外反する胴部破片、37は胴下半部の破片と思われる。色調は橙色を呈し、胎土には石英が含まれるほか、多量の纖維が入る。また、極粗砂がほとんど含まれないため、かなり軟質である。時期は前期初頭の花積下層式並行期に比定される。39~42は同一個体で、2Dグリッドからまとめて検出された土器片の一部である。文様は結節を有するLRの原体によって斜行繩文が施されている。42には同一原体による回転方向を変えた施文により羽状構成がなされたような部位が見られるが、はっきりしない。色調は、鈍い褐色を呈し、胎土には纖維、石英が含まれるほか、極粗砂が多く含まれ表面がざらつく。時期は前期初頭の花積下層式並行期の可能性が高いと考えている。ただし、結節部の回転により綴絡文もしくはS字状の文様を施す土器の時期幅は広いため、大木2a式(黒浜式並行期)まで時期が新しくなる可能性があるとしておく。

2類土器 (43)

無節の繩文Rが施された土器を本類とする。10Bグリットから同一個体の物がまとめて24点出土している。色調は暗赤褐色を呈し、胎土には纖維、石英、白色粒子が含まれる。焼成は良好とはいえない。時期は前期中葉の黒浜式並行期に比定される可能性が高い。

(4) 第III群土器 (44~51)

第I・II群以外の土器を本群とする。44はRLとLRによる結束羽状繩文を縦位に施文している。中期前葉に位置づけられる。45・46はLRの単節繩文が施されている。ただし、46は縦方向の回転施文によっている。ともに中期の所産と考えられる。47は後期、48は後期～晩期のものと考えられる。49は燃糸文が縦位に施されている。50、51は同一個体の口縁と胴部破片である。49~51は時期がはっきりしない。



第9図 群別土器出土分布図

第3表 土器調査表

番号	器物	分類	形 位	分 類	調 研	動	土	輪郭	色調外面	色調内面	焼 成	出 土 位 置	備 考
1	直鉢 口縁部 鋸歯	1—1	腹全体に衣模、口部底に衣模を施す文様がわざか	ナデ	石塗、金雲母、白色粒子	ナデ	ナ	ナ	黄褐色か緑色 灰褐色	黄褐色か緑色 灰褐色	普通	2B15/B6.7 S X5/G3B	
2	直鉢 口縁部 鋸歯	x	口縁部に衣模、口部底に衣模を施す	ナデ	石塗、金雲母	ナ	ナ	ナ	黄褐色か緑色 灰褐色	黄褐色か緑色 灰褐色	不具	6C 15.20	
3	直鉢 口縁部	x	口部前にキデ: ワ字彫文と地文に衣模を施す	ナデ	石塗、金雲母、白色粒子	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	普通	2D9	
4	直鉢 口縁部	x	泥先端文	ナ	石塗、金雲母	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	やや不良	x	
5	直上平底	x	泥先端文を地文に、衣模を施す。やや膨らむ。	ナ	石塗、金雲母	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	普通	x	同一個体
6	直鉢	x	丸底	ナデ	石塗、金雲母	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	普通	2D10	
7	直下平底く	x		ナデ	石塗、金雲母	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	やや不良	2D7	
8	直鉢	x	綴丸 L R 単頭繩文	ナ	石塗、白色粒子	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	普通	2D10	
9	直鉢	x	x	ナ	石塗、白色粒子	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	普通	2D9	同一個体
10	直下平底	x	円孔	ナ	石塗、白色粒子	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	普通	2B15	
11	直鉢	x	口縁部	ナ	石塗、白色粒子	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	普通	3D2	
12	直下平底	x	綴丸 单頭繩文	ナ	石塗、白色粒子	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	普通	x	
13	直鉢上半部	x	泥先端文	ナ	石塗、白色粒子	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	普通	2T(2D)	
14	直鉢	x		ナ	石塗、白色粒子	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	普通	5D7	
15	直鉢	x	綴先するRL单頭繩文の地文と花模の組み合せ、口唇部にキデ	ナ	石塗、金雲母、白色粒子	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	不具	5D8	
16	直鉢	x	綴先するRL单頭繩文を地文として、芯模を施す	ナ	石塗、金雲母	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	良	2T(2D)	
17	直鉢	x	x	ナ	石塗、白色粒子	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	普通	3B6	
18	直鉢	x	口縁部にキデ	ナ	石塗、白色粒子	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	普通	4B16	
19	直鉢	x	綴先するRL单頭繩文の地文と花模の組み合せ	ナ	石塗、金雲母	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	普通	4B16	
20	直鉢	x	綴先するRL单頭繩文の地文と花模の組み合せ	ナ	石塗、金雲母	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	普通	4B14.15	同一個体
21	直上平底	x		ナ	石塗、白色粒子	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	普通	4B15	
22	直鉢	x	x	ナ	石塗、白色粒子	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	普通	4B15	
23	直鉢	x	綴先するRL单頭繩文	ナ	石塗、白色粒子	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	普通	4B12	
24	直鉢	x	綴先から斜行に變わるRL单頭繩文	ナ	石塗、白色粒子	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	普通	4B15	
25	直鉢	x	口縁、劉底 1—2 深走から斜行に變わるRL单頭繩文	ナ	石塗、白色粒子	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	普通	2D15.20	
26	直下平底	x	1—1 不明	ナ	石塗、白色粒子	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	やや不良 (C) 19	x	
27	直鉢	x	x	ナ	石塗、白色粒子	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	普通	4B23	
28	直上平底	x	芯模文	ナ	石塗、白色粒子	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	普通	2B5	
29	直鉢	x	1—2 深走するRL单頭繩文	ナ	石塗、白色粒子	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	普通	4B15	
30	直鉢	x	x	ナ	石塗、白色粒子	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	普通	4B15	
31	直鉢近く	x	x	ナ	石塗、白色粒子	ナ	ナ	ナ	黄褐色	黄褐色	普通	x	

番号	器種	部 位	分 類	圖 形 と 文 様	調 整	胎 土	燒 陶	色調外觀	燒 成	出 土 位 置	備 考
32	環狀	底 近く	I-3	擦走する墨文	ナデ	石灰、白色粒子	有り	板色	燒成	普通	5E25
33	口縁	底 近く	ア	(一括斜行と直行)	ア	ア	ア	燒成	ア	ア	同一個体
34	口縁	底 近く	ア	斜行 R L 斜行文、口唇部にナデ	ア	ア	ア	燒成	ア	ア	ア
35	口縁	口縁	ア	斜行 R L 斜行文、外反する	ア	石英	ア	燒成	ア	ア	ア
36	口縁	口縁	ア	斜行する R L 斜行文	ア	ア	ア	燒成	ア	ア	ア
37	口縁	口縁	ア	斜行する R L 斜行文	ア	ア	ア	燒成	ア	ア	ア
38	口縁	口縁	ア	斜行する R L 斜行文	ア	ア	ア	燒成	ア	ア	ア
39	口縁	口縁	ア	斜行する R L 斜行文	ア	ア	ア	燒成	ア	ア	ア
40	口縁	口縁	ア	斜行する R L 斜行文	ア	ア	ア	燒成	ア	ア	ア
41	口縁	口縁	ア	斜行する R L 斜行文	ア	ア	ア	燒成	ア	ア	ア
42	口縁	口縁	ア	斜行する R L 斜行文	ア	ア	ア	燒成	ア	ア	ア
43	口縁	II-2	施墨の R 墓文	石英、白色粒子	ア	石英	ア	燒成	ア	やや不良	10B12
44	口縁	III	R L の縦の斜行羽状墨文	石英	ア	石英	ア	燒成	ア	普通	5E11
45	口縁	ア	L R 斜行文	ア	ア	ア	ア	燒成	ア	ア	37T(5E)
46	口縁	ア	L R 斜行文、原体を斜方間に施がす	ア	ア	ア	ア	燒成	ア	ア	S XC(3B)
47	口縁	ア	横文	ア	ア	ア	ア	燒成	ア	ア	10B21
48	口縁	ア	横文	ナデ	ア	ア	ア	燒成	ア	良	6C1
49	口縁	ア	横文	ナデ	ア	ア	ア	燒成	ア	良	13C23
50	口縁部	ア	横文	ア	ア	ア	ア	燒成	ア	ア	13E17
51	口縁部	ア	ア	ア	ア	ア	ア	燒成	ア	ア	ア

B 石器 (図版 5 ~13)

上小島遺跡からは、総計688点の石器が出土している。このうち剝片類が539点(78.3%)出土しており、石器の大部分を占める。残り149点が剝片石器類・石鏃・磨石類・石核等である。剝片石器類については、器種別に分類を行い、第3表に示した。石器の中では、剝片類を除くと不定形石器がもっとも多くなり(82点)、石匙(10点)、箇状石器(9点)がこれに続く。

出土分布状況は、遺物包含層(II・IV層)からの出土が大部分で、遺構に伴うものはほとんどない。また、調査区を南から延びる戸屋山の尾根(11・12列付近)を境に東西に分けると、西側には集中した出土範囲が見られるが、東側は少數が散在する程度である(第10・11図)。時期については、伴出する土器から、大部分が縄文時代早期終末に属するものと考えられる。

器種	石鏃	石錐	石匙	箇状石器	打製石斧	磨製石斧	不定形石器	石鏃	磨石類	石皿	剝片類	石核	合 計
出土数 (%)	2 (0.3)	1 (0.1)	10 (1.5)	9 (1.3)	2 (0.3)	3 (0.4)	82 (11.9)	5 (0.7)	16 (2.3)	1 (0.1)	539 (78.3)	18 (2.6)	688

第4表 石器器種別出土点数

(1) 石鏃(1)

西側から2点出土しており、1点は未成品である。1は完形品で、基部に浅い抉りが施されており、凹基無茎鏃に分類される。長幅比は2.2:1と細長く、薄手である。調整は全面に及ばず、特に裏面は素材の剝離面を広く残している。

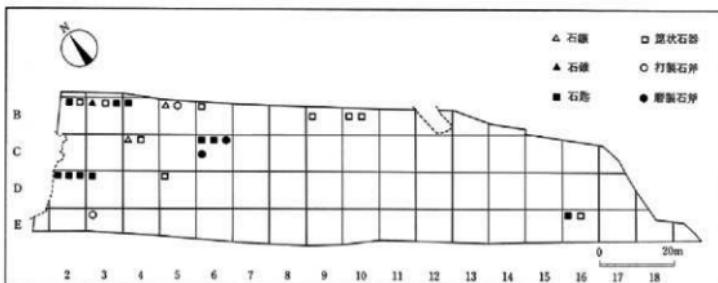
もう1点は、製作途中で先端部を破損した未成品と考えられ、破損箇所には新たな剝離が認められる。1と比較するとやや厚みがあり、基部形態は直線的で抉りはない。

石材は、2点とも頁岩である。

(2) 石錐(2)

西側から1点のみ出土している。錐部から広がる右端部には、つまみ部が作り出されており、一方の端部は欠損している。このことから、石匙にも分類できるが、ここでは刃部を優先させて石錐とした。錐部には、丁寧な二次加工が施され、先端部は銛利に仕上げられている。

石材は、頁岩である。



第10図 石器器種別出土分布図(1)

(3) 石匙 (3~10)

未完成品2点を含め、10点出土している。未完成品の1点以外は、刃部が細長い綫型である。このうち先端部の形状では、細く尖るものが4点(6は欠損しているが、推定でこれに含める)、横に広がるもののが4点と分かれる。4は、長さ7.8cm、幅2.5cmの細長い木の葉状を呈し、腹面には光沢のある面状の摩擦痕が観察される。9・10は正裏面に二次加工を施し、両側縁を刃部とすると共に、横に広がった先端部にも調整を施し刃部を作り出している。

出土状況は、東側から1点出土しているが、それ以外は西側からの出土で、特に2Dグリッド付近に集中している。

石材は、緑色凝灰岩4点、頁岩3点、珪質頁岩2点、鉄石英(赤)1点である。

(4) 篦状石器 (11~19)

9点出土しており、11~13は比較的小型で長さは4.1cm~5.8cm、14~19はやや大きくなり長さは7.5cm~9.9cmとなり、大きさで2つのタイプに分かれる。分類は、片面加工のもの、半両面加工のものをA類(5点)とし、両面加工のものをB類(4点)とした。

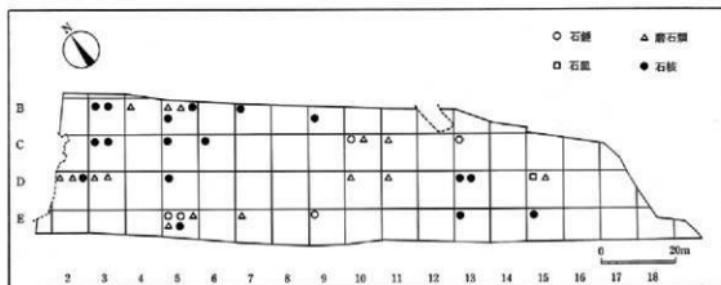
A・B類とも、ほとんどが片刃の円刃もしくは偏刃を呈するが、14は刃部が内側に抉られている。これは、使用により刃部が破損したため、新たに刃部を作り出したためと考えられる。15は刃部が腹面側に湾曲しており、急角度の剝離が施されている。16は左側縁に大型剝離が施され、鋸歯状を呈する。形態では、ほとんどが基部から刃部に向かって広がるが、18・19は基部と刃部がほぼ同じ幅で長楕円形に近く、刃部は両刃である。

出土状況は、西側にやや偏りがあるが、石匙のように集中した出土範囲は認められない。また、9・10 Bグリッドから3点出土しているが、この付近の分布は不定形石器・剝片類にも同様の傾向が見られる。

石材は、緑色凝灰岩3点、頁岩、流紋岩2点、珪質頁岩、珪質凝灰岩1点である。

(5) 打製石斧 (20・21)

西側から2点出土している。20は長さ11.5cm、幅5.8cmの楕形を呈し、基部から刃部にかけて厚みをもたせてある。刃部には使用による刃こぼれと、正裏面には刃部から基部1/2ほどにかけて磨耗痕が観察される。石材は流紋岩である。21は長さ8.6cm、幅3.8cm、厚さは1.3cmと薄く扁平形を示す。原石の形態を利用したもので、正裏面とも穂表皮が2/3以上残っている。加工は側縁と刃部に剝離が施され、刃部がやや細くなる。風化が著しく、剝離面は不明瞭である。石材は粘板岩である。



第11図 石器種別出土分布図(2)

(6) 磨製石斧 (22~24)

3点出土しているが、いずれも破損品であり、刃部側が2点、基部側が1点である。22・23は、刃部側が出土しており、側縁に稜をもつ定角式磨製石斧に分類される。現存する長さは異なるが、2点ともほぼ同じ最大幅(5.5cm、5.3cm)であることから、完形状態では同程度の長さ(12cm前後)であったと推定される。石斧全面は滑らかに研磨されており、線状の研磨痕が観察される。また、刃部には若干の刃こぼれが認められる。出土状況は、西側6Cグリッドから2点まとめて出土している。24は基部側が出土しており、断面が横円形を呈し乳棒状磨製石斧に分類される。表面は風化が著しく、研磨面はほとんど残っていない。

石材は、22・23が蛇紋岩、24が流紋岩である。

(7) 不定期石器 (25~50)

定期石器以外の二次加工がある剝片石器を不定形石器とした。出土した石器類のうち、剝片類を除いた149点中では、55.0%を占めている。

分類は、五丁歩遺跡〔高橋1992〕に準じ、以下のように行い、分類別割合を第12図に示した。

A類：刃部の二次加工が、小・中型剝離で連続的に施されている。

B類：刃部の二次加工が、鋸歯状を呈している。

C類：側縁の一辺にノッチ状の抉りをもつ。

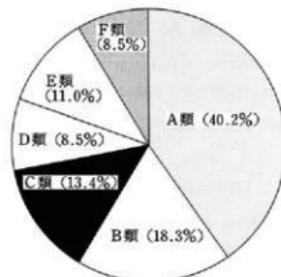
D類：両面に二次加工が施されている。

E類：縁辺部の一部に不連続の小・中型剝離が施されている。

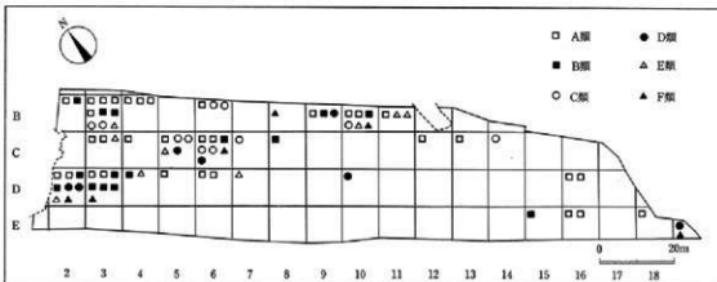
F類：A～E類の形状が2か所以上認められる。

分類別出土数では、A類がもっとも多く40.2%を占め、B類(18.3%)、C類(13.4%)がこれに続く。F類のうち、C類の形状を合わせてもつものが4点ある。これをC類に含めると、C類は18.3%に上がり、A類に次ぐ出土数となる(B類と同数)。

出土分布状況は、他の石器類と同様に、西側に集中した出土範囲が見られる。その中でも、やや東よりの9～11Bグリッ



第12図 不定期石器分類別割合



第13図 不定期石器分類別出土分布図

石材分類	頁岩	珪質頁岩	綠色凝灰岩	珪質凝灰岩	流紋岩	鉄石英	合計
A類	11	5	4	4	9	0	33
B類	3	0	4	2	6	0	15
C類	2	3	4	0	2	0	11
D類	0	2	3	1	1	0	7
E類	1	0	3	0	3	2	9
F類	2	0	0	2	1	2	7
合計	19	10	18	9	22	4	82

第5表 不定形石器分類別石材表

下にはまとまった出土範囲が見られ、これは剝片類以外では不定形石器と前述した範状石器がほとんどを占めている。分類別の出土分布状況では、特に傾向は認められず散在している（第13図）。

石材は流紋岩（26.8%）、頁岩（23.2%）、緑色凝灰岩（22.0%）が多く使用されている。鉄石英は4点と少なく、使用はE・F類に限られている。また、A類は頁岩系の使用率（48.5%）が高く、B類は流紋岩の使用率（40.0%）が高い。緑色凝灰岩、珪質凝灰岩は、調査区域に多数存在しており、不定形石器での使用率は32.9%、石器類（剝片を除く）全体では28.2%を占め、身近な石材として多く利用されていたものと考えられる（第4表）。

（8）石錘（51～55）

礫石錘が5点出土している。いずれも、相対する縁辺部の2か所に剥離を施し、抉りを作り出している。抉りの位置では、円礫の短軸方向に施されているものが1点あるが、他の4点はいずれも長軸方向に施されている。54は縁辺以外の大部分に、55は両面とも部分的に滑らかな磨痕が観察される。長幅比は平均1.1：1である。

出土分布状況は、他の石器類と異なり西側への偏りは特に認められず、全域に散在している。

石材は、流紋岩3点、安山岩・砂岩1点である。

（9）磨石類（56～65）

表面に磨痕、凹み、敲打痕が認められる礫で、16点出土している。分類は、それぞれの痕跡により、以下のように行った。

A類：磨痕だけが認められる。

B類：磨痕と凹みが認められる。

C類：磨痕と敲打痕が認められる。

D類：敲打痕だけが認められる。

さらにA類については、磨痕が表面にある場合は1、側縁にある場合は2を記号に付けて細分した。

A 1類は5点出土している。56は平面形はいびつな円形状で、側縁を除いて両面に滑らかな磨痕が認められる。A 2類は2点出土しており、57・58とも断面はやや扁平な橢円形を呈し、両側縁にはザラザラした磨痕が認められる。また、57は被熱により一部黒変し破損している。

B類は2点出土している。59は、やや扁平な卵形で両面に磨痕が認められ、片面の中央には浅くぼやけた凹みがある。57と同様に、一部被熱により黒変し破損している。60は底辺が丸みをもった断面三角形を呈し、縦とその片面に磨痕が認められる。磨面には浅い凹みがある。

C類は3点出土しているが、63は特殊磨石に近いものと考えられる。61は片面に磨痕が認められ、被熱により大部分が黒変し、ひび割れが生じている。62は表面に滑らかな磨痕が認められ、側縁のやや突き出た部分にはザラザラした敲打痕がある。

D類は3点出土しており、いわゆる礫石に相当するものと考えられる。64は破損しているが、断面が橢円形の棒状を呈すると思われる。端部と片側の側縁には、剝離痕と敲打痕が認められる。65は平面形が角のとれた三角形状を呈し、側縁には凹凸のある敲打痕が認められる。

出土状況は、西側に偏りが見られるが、特に集中した範囲は認められない。

石材は65が安山岩で、これ以外は流紋岩である。

(10) 石皿類

東側15Dグリッドから1点出土している。平坦な表面には不明瞭な磨痕が認められ、ほぼ全面が被熱により赤変している。側縁には剝離痕が見られる。

石材は、流紋岩である。

(11) 剥片類(67~78)

石器製作の素材として石核から剝離された素材剥片、その際生じた調整剥片、素材剥片から石器を作成する際に生じた調整剥片を剥片類とした。これらの剥片類は、総数で539点出土している。

分類は、五丁歩遺跡〔高橋1992〕に準じ、背面の様子と打面の様子について観察を行い、それぞれ3つに分類した。

背面の様子

A類：背面のすべてが自然面で構成される剥片

(背面自然面)

B類：背面の一部が自然面で構成される剥片

(背面一部自然面)

C類：背面のすべてが剝離面で構成される剥片

(背面剝離面)

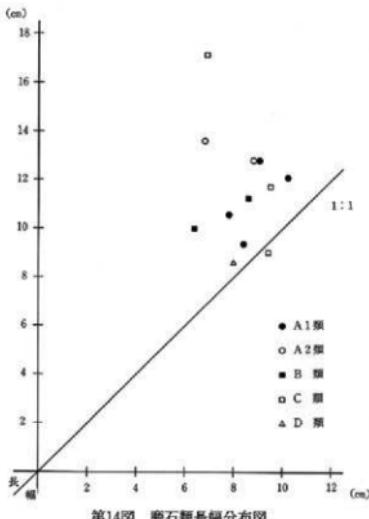
打面の様子

1類：打面が自然面の剥片

(打面自然面)

2類：打面が一つの剝離面からなる剥片(打面単剝離面)

3類：打面が二つ以上の剝離面からなる剥片(打面複剝離面)



第14図 磨石類長幅分布図

この分類により、分類可能なものは249点(46.2%)、主要剥離面や打点が不明確なため分類不可能なものが290点(53.8%)となつた。分類可能な剝片類を、背面の様子について見ると、C類(背面剥離面)が142点(57.1%)ともっと多く、次いでB類(背面一部自然面)89点(35.7%)、A類(背面自然面)18点(7.2%)となっている。打面の様子について見ると、3類(打面複剥離面)が121点(48.6%)、2類(打面単剥離面)が104点(41.8%)と、ほぼ同じ割合となつた。1類(打面自然面)は24点(9.6%)と少なかつた。

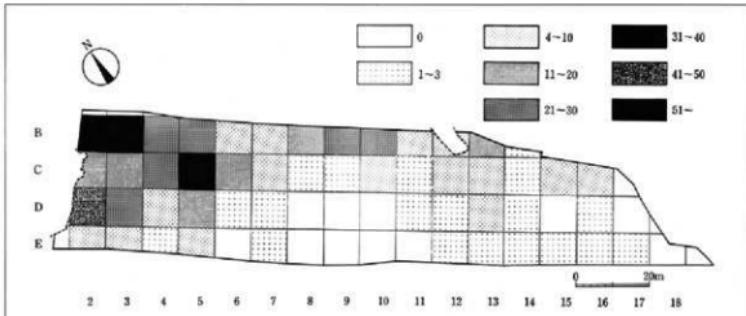
出土分布状況は、総数539点のうち、出土地点不明の4点を除いた535点を対象としたが、集中して出土している範囲が2か所認められた。1か所は遺構の集中している3Bグリッドを中心とするもので、もう1か所は8~10Bグリッドを中心とする範囲である。このような状況は、土器や他の石器の出土分布状況と似た傾向にある。

出土した剝片類を石材別に見ると、流紋岩が255点と剝片類全体の約半数(47.3%)を占める。次いで頁岩が26.3%、緑色凝灰岩が13.5%、珪質頁岩が5.8%、珪質凝灰岩が5.2%となっている。黒曜石の剝片が1点出土している。色調や自然面の様子を観察すると、新発田市周辺のものに近似している。

前述の分類にしたがって分類可能な249点を対象とし、分類別に石材を見ると、ほとんどの分類において流紋岩、頁岩、緑色凝灰岩の3石材が大半を占めている。また、珪質頁岩や珪質凝灰岩、鉄石英など硬質な石材は、B類やC類、2類や3類など剝離行程が進んだものに使われており、A類や1類にはほとんど見られない。

分類	背面の様子	打面の様子	出土点数 (%)	図版番号
A 1類	自然面	自然面	6 (2.4)	67
A 2類	自然面	単剥離面	9 (3.6)	68
A 3類	自然面	複剥離面	3 (1.2)	
B 1類	一部自然面	自然面	7 (2.8)	69
B 2類	一部自然面	単剥離面	46 (18.5)	70・71
B 3類	一部自然面	複剥離面	36 (14.5)	72
C 1類	剝離面	自然面	11 (4.4)	73
C 2類	剝離面	単剥離面	49 (19.7)	74・75
C 3類	剝離面	複剥離面	82 (32.9)	76・77・78

第6表 剥片類分類別出土数



第15図 剥片類出土分布図

石材名	流紋岩	頁岩	緑色凝灰岩	珪質頁岩	珪質凝灰岩	鐵石英(赤)	鐵石英(黄)	玉髓	粘板岩	黑耀石	合計
出土点数	255	142	73	31	28	3	2	2	2	1	539

第7表 剥片類石材別出土点数

石材分類	流紋岩	頁岩	緑色凝灰岩	珪質頁岩	珪質凝灰岩	鐵石英(赤)	鐵石英(黄)	粘板岩	合計
A 1類	2	2	1	0	1	0	0	0	6
A 2類	3	5	1	0	0	0	0	0	9
A 3類	0	1	2	0	0	0	0	0	3
B 1類	4	0	3	0	0	0	0	0	7
B 2類	23	10	8	3	2	0	0	0	46
B 3類	16	9	5	5	0	0	0	1	36
C 1類	6	1	2	1	0	1	0	0	11
C 2類	29	8	5	5	2	0	0	0	49
C 3類	23	23	16	6	13	0	1	0	82
合計	106	59	43	21	17	1	1	1	249

第8表 剥片類分類別石材表

(2) 石核 (79~82)

18点出土している。西側からの出土が多いことは、他の石器類と同様であるが、東側からも4点出土している。ほとんどが剥片を剥離した残核と考えられるが、82のように礫表面を多く残すものが4点含まれている。

使用石材は、流紋岩5点、緑色凝灰岩5点、頁岩4点、珪質頁岩3点、珪質凝灰岩1点である。

第9表 石器観察表

() 内は現在値を示す

図No.	器種	出土地点	層位	分類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石 材	備 考
1	石鏃	5B-4	II		(2.8)	1.3	0.4	(1.3)	頁岩	先端部・脚部欠損
2	石錐	3B-18	II		3.8	(5.0)	0.7	(7.7)	頁岩	石錐から作り替え 側縁欠損
3	石匙	2D-5	IV		(5.6)	3.4	1.2	(16.9)	珪質頁岩	先端部欠損
4	石匙	3D-17	II		7.8	2.5	1.0	14.9	流紋岩	腹面に光沢のある摩擦痕
5	石匙	2B-9	II		5.8	3.2	1.4	18.2	珪質頁岩	
6	石匙	2D-20	IV		(4.4)	2.2	0.8	(7.0)	頁岩	先端部欠損
7	石匙	6C-7	II		5.5	4.5	0.9	15.9	頁岩	
8	石匙	4B-15	II		6.3	2.6	1.1	12.5	鉄石英(黄)	
9	石匙	2D-3	IV		6.1	3.2	0.8	16.2	緑色凝灰岩	
10	石匙	6C-7	II		5.1	2.9	0.9	11.0	緑色凝灰岩	先端部に摩擦痕
11	箆状石器	4C-5	II	A	4.1	2.5	0.7	5.9	珪質凝灰岩	
12	箆状石器	2B-9	II	A	5.4	3.0	0.9	14.5	緑色凝灰岩	
13	箆状石器	6B-11	II	A	5.8	3.1	1.2	20.0	頁岩	
14	箆状石器	10B-6	IV	A	7.5	4.5	1.7	67.7	緑色凝灰岩	
15	箆状石器	5D-7	II	A	7.9	4.2	2.1	59.7	流紋岩	
16	箆状石器	7B	II	B	8.3	4.0	1.6	48.8	珪質頁岩	
17	箆状石器	9B-17	II	B	8.6	3.8	2.0	65.7	緑色凝灰岩	
18	箆状石器	10B-18	II	B	9.7	4.5	2.1	86.4	頁岩	
19	箆状石器	3B-7	II	B	9.9	4.1	2.0	70.0	流紋岩	
20	打製石斧	3E-11	IV		11.5	5.8	3.0	161.3	流紋岩	
21	打製石斧	5B-18	II		8.6	3.8	1.3	53.7	粘板岩	
22	磨製石斧	6C-14	II		(5.2)	5.5	(2.5)	(78.6)	蛇紋岩	基部欠損
23	磨製石斧	6C-19	IV		(7.7)	5.2	(2.5)	(160.3)	蛇紋岩	基部欠損
24	磨製石斧	不明			(7.6)	(4.3)	(3.5)	(152.7)	流紋岩	刃部欠損
25	不定形石器	6B-18	II	A	3.3	2.7	0.7	5.6	緑色凝灰岩	
26	不定形石器	4B-13	II	A	4.7	2.9	1.1	10.4	流紋岩	
27	不定形石器	5C-19	II	A	1.5	4.1	0.8	3.4	頁岩	
28	不定形石器	16E-16	III	A	(5.3)	(2.7)	1.1	(12.5)	頁岩	先端部欠損
29	不定形石器	4B-9	II	A	4.3	4.2	1.3	19.0	珪質頁岩	
30	不定形石器	3B		A	5.0	5.8	1.3	30.1	珪質頁岩	
31	不定形石器	6D-4	V	A	7.0	6.1	1.8	68.3	頁岩	
32	不定形石器	2D-4	IV	A	4.9	3.6	1.0	15.5	流紋岩	
33	不定形石器	6D-22	V	A	5.4	9.0	1.3	49.9	頁岩	
34	不定形石器	16E-4	V	A	4.3	4.2	1.2	13.5	珪質頁岩	
35	不定形石器	5D-7	II	A	6.7	3.2	1.5	22.9	珪質頁岩	
36	不定形石器	4B-1	II	A	9.5	8.5	1.9	111.8	緑色凝灰岩	
37	不定形石器	3D-5	IV	B	7.4	4.6	1.5	36.8	流紋岩	
38	不定形石器	10B-12	IV	B	7.6	5.9	2.4	78.7	緑色凝灰岩	
39	不定形石器	2D-11	IV	B	10.8	5.4	1.7	77.5	流紋岩	

40	不定形石器	4D-10	II	B	7.7	4.1	1.3	39.7	頁岩	
41	不定形石器	3B-19	V	C	5.9	5.7	1.6	52.2	流紋岩	
42	不定形石器	6C-1	II	C	5.3	5.2	2.4	45.9	頁岩	
43	不定形石器	10D-5	II	D	10.5	5.6	2.6	129.0	流紋岩	
44	不定形石器	2D-2	IV	D	4.3	7.1	2.9	71.0	珪質變灰岩	
45	不定形石器	9B-15	II	D	10.4	5.0	2.0	102.2	綠色變灰岩	
46	不定形石器	3B-21	II	E	3.3	4.2	0.8	11.7	鐵石英(眞)	
47	不定形石器	2D-12	IV	E	4.3	5.7	1.3	27.8	鐵石英(赤)	
48	不定形石器	6C-23	II	F	2.3	5.2	1.6	13.2	頁岩	
49	不定形石器	10B-18	II	F	5.0	7.5	1.7	53.7	鐵石英(赤)	
50	不定形石器	6C-15	II	F	8.2	5.9	1.1	23.4	流紋岩	
51	石鍬	10C-18	IV		6.3	7.0	1.7	96.7	安山岩	
52	石鍬	13C-19	IV		11.7	10.8	2.2	386.2	砂岩	
53	石鍬	9E-25	IV		9.1	6.7	2.6	206.3	流紋岩	
54	石鍬	5E-9	IV		10.2	(8.4)	3.5	(336.8)	流紋岩	両面に磨痕 側縁欠損
55	石鍬	5E-9	IV		11.4	9.7	3.2	416.0	流紋岩	両面に磨痕
56	磨石類	4B-15	II	A1	9.4	8.4	3.9	354.5	流紋岩	
57	磨石類	2D-9	II	A2	12.8	8.8	5.8	(824.9)	流紋岩	被熱による黒変と一部欠損
58	磨石類	3D-21	II	A2	13.6	6.8	3.8	481.9	流紋岩	
59	磨石類	5B-6	IV	B	11.3	8.6	5.1	(612.6)	流紋岩	被熱による黒変と一部欠損
60	磨石類	11D-7	IV	B	10.0	6.4	7.0	485.0	流紋岩	
61	磨石類	2D-13	IV	C	11.7	9.5	3.9	510.0	流紋岩	被熱による黒変とひび割れ
62	磨石類	5E-6	IV	C	9.0	9.4	4.4	437.4	流紋岩	
63	磨石類	3D-7	II	C	17.1	6.9	5.5	491.9	流紋岩	
64	磨石類	5B-21	II	D	(10.1)	5.9	4.1	(320.4)	流紋岩	欠損
65	磨石類	11C-17	IV	D	8.6	8.0	1.8	130.4	安山岩	
66	石皿	16D-19	IV		30.8	15.8	6.1	4960.0	流紋岩	被熱により赤変
67	剝片	2E-13	IV	A1	6.5	5.5	1.4	34.9	頁岩	
68	剝片	5D-7	II	A2	5.9	7.9	2.1	69.1	綠色變灰岩	
69	剝片	6B-16	II	B1	6.7	6.8	1.7	37.8	綠色變灰岩	
70	剝片	2D-14	IV	B2	6.0	6.9	2.2	62.1	頁岩	
71	剝片	10B		B2	12.0	9.0	3.2	191.2	頁岩	
72	剝片	3C-15	II	B3	6.1	6.2	1.5	38.3	流紋岩	
73	剝片	10B-22	II	C1	5.8	7.6	1.6	52.6	珪質頁岩	
74	剝片	9B-6	II	C2	5.5	5.3	1.7	32.4	綠色變灰岩	
75	剝片	7C-2	II	C2	7.3	5.8	2.0	66.9	珪質變灰岩	
76	剝片	5C-10	II	C3	6.8	7.6	1.9	49.2	流紋岩	
77	剝片	5C-10	II	C3	6.0	6.3	1.8	36.8	流紋岩	
78	剝片	5C-20	II	C3	6.5	6.5	2.2	50.9	流紋岩	
79	石核	5E-20	II		6.6	6.1	3.0	94.5	綠色變灰岩	
80	石核	9B-15	II		5.2	8.9	3.7	119.4	綠色變灰岩	
81	石核	7B-17	II		8.6	12.6	3.6	354.0	珪質頁岩	
82	石核	不明			14.5	16.0	14.9	1500.0	流紋岩	

6 自然科学の分析

上小島遺跡出土試料の放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1. 試料と方法

試料名	種類	前処理・調整	測定法
S K 7	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	AMS法

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 ¹⁾ (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ ²⁾ (‰)	補正 ^{14}C 年代 ³⁾ (年BP)	歴年代 ⁴⁾ 交点 (1σ)
S K 7	$5,130 \pm 50$	-25.3	$5,130 \pm 50$	B.C. 3,960 (B.C. 3,975-3,935) (B.C. 3,860-3,820)

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C} / ^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

4) 歴年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより、歴年代(西暦)を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正是10,000年BPより古い試料には適用できない。歴年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と歴年代補正曲線との交点の歴年代値を意味する。 1σ は補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した歴年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ 値が表記される場合もある。

第IV章 調査の成果とまとめ

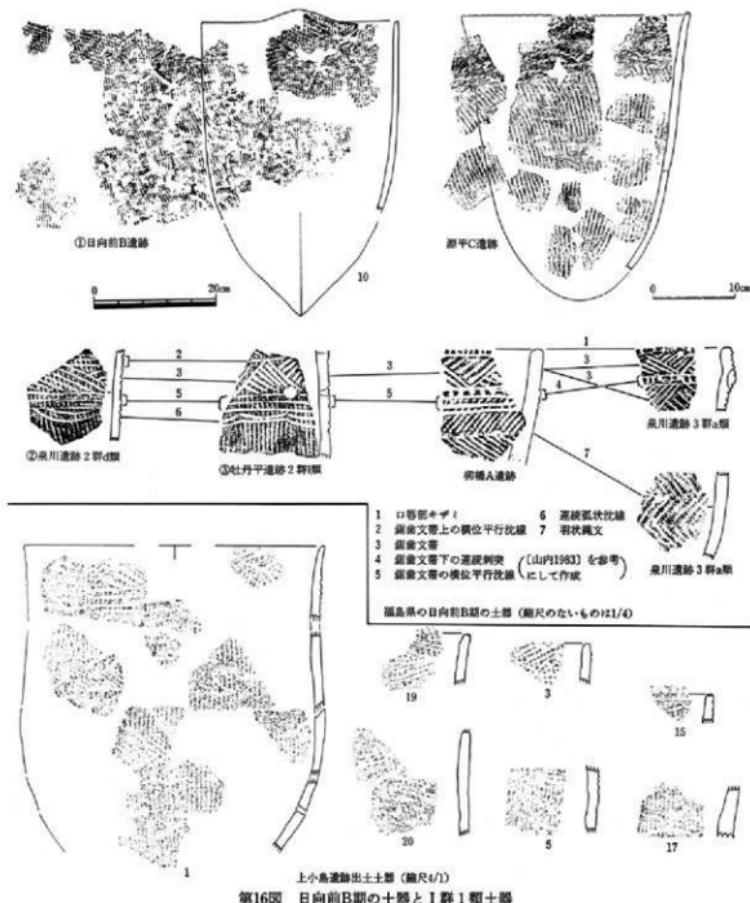
本遺跡は、前章まで述べたように縄文時代早期終末を中心とした遺跡である。その大きな特徴は、新潟県では類例の少ない早期最終末に所属する繩文条痕系土器がまとまって出土したことにある。本章では、これらの土器片について若干の考察を加え、まとめに代えたい。

1 日向B期とI群1類土器

日向B期とは、阿武隈山地南半を中心に福島県全域に出土する土器群の所属時期を表す言葉である。中村五郎氏はその土器群の特徴を「材料の粘土に纖維を含み、尖底もしくは丸底の深鉢で、内面に条痕ではなく、表面の全部または大部分に施される繩文は0段多条で条が器面に対して縱に走る。」「口縁近くに文様帶をめぐらし文様は沈線で単なる横線・鋸歯文・連弧文・複合鋸歯文などを施す。」と述べている〔中村1983〕。また、この土器群には源平C遺跡〔芳賀1980〕のように、口縁部文様が沈線でなく縄圧痕で描かれる土器が併存することで知られる。鈴鹿良一氏はこの種の土器を、「縄圧痕で口縁部文様を描いている類があり、少數ながら數遺跡で併出している。沈線文系と同じような図柄を描いているが弧線の方が多用される傾向がある。これに使われる繩は2段捻りのものに限られ、また、沈線文と組み合わせられることはない」という特徴がある。そして、この系統の土器の文様帶には地文がないのが運営で前代のように条痕をもつものはない。この縄圧痕文系の土器は、素山II a式以降の連続する東北地方中・北部を中心に最も土器群の系統らしく、宮城県以北では縄圧痕文系が主体となるようである。」としている〔鈴鹿1989〕。日向B期を早期に入れるか前期に入れるかは別として、大枠で大畠G式→日向B期→花積下層式という変遷が考えられている。また、関東・東北北部・北陸等の土器型式との並行関係も解明されつつあり、今後の発掘調査の成果が期待される。

山内幹夫氏は、日向B期の土器群の口縁部沈線文が変遷していく様子を数段階に分け、花積下層に至るまでの過程を説明している。変遷の様子は3段階に分けられ、①平行沈線が羽状に構成されるもの（日向B期遺跡B地点等）、②左右交互に傾斜の変わる平行沈線を取り組ませるもの（泉川遺跡・南原遺跡等）、③文様帶が2段に分化し、上段に矢羽状沈線、下段に鋸歯文の区画の中に短沈線を配するもの（牡丹平2群1類）、の順となる。そして、花積下層式の口縁部鋸歯文の起源を3段階目の鋸歯文区画内の平行沈線に求め、羽状繩文が施される柳橋A遺跡〔高橋1983〕と泉川遺跡〔鈴鹿1980〕3群a類土器を牡丹平遺跡〔山内1983〕2群1類に後続する資料としている〔山内1983〕。以下この分類とI群1類土器を対比する。1は連弧文と鋸歯文帯で構成された土器である。ただし、単に鋸歯文帯といっても、左右交互に傾斜の変わる平行沈線を取り組ませる場合と鋸歯文の区画の中に短沈線を充填する場合がある。1の場合は、口縁部の残存が少ないと認められたことは言えないが、前者であろうと推察される。従って、1は山内分類の第②段階にあたり、泉川遺跡2群d類土器に比定される。次に3~7であるが、口縁部破片には鋸歯文帯が見える。また、胴上部破片には連弧文も観察される。同一個体であれば、広い範囲で施された可能性が強ことを考慮すると、山内分類のどの段階にも属さないといえる。15~17の土器片は、地文+口縁部沈線と胴部沈線がアンバランスな関係で一体化する。地文と口縁部の鋸歯文帯と横位平行沈線は日向B

期の特徴であるが、胴部の弧線文は大畠G式の特徴といえる。したがって山内氏のどの段階にも属さず、類例もない。今後の発掘の成果により解明されるべきタイプである。18~24は日向B遺跡出土土器とよく似ていることから、山内分類の第①段階にあたる。28は地文がないという点で他の土器と一線を画する。したがって山内氏のどの段階にも属さない。なお、口縁部に地文を有しないという点は、前述した口縁部に繩状地文を有する土器（源平C遺跡等）との共通点となる。



第16図 日向B期の土器とI群1類土器

2 日向B期とI群2・3類土器との関係

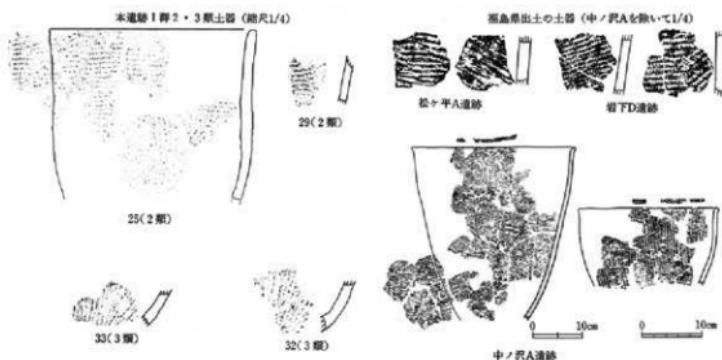
本遺跡のI群2・3類土器には早期終末の位置を与えた。しかし、日向B期との併存関係は明らかにしていない。本遺跡は包含層が薄く、上部からの擾乱をかなり受けている。また、土器を伴う遺構も存在しないため、併存関係の把握は不可能である。したがって本項は、今後新潟県での出土例が増加することが予想されるI群2・3類土器の出土例を述べ、日向B期の土器群との併存の可能性を示唆する。

I群2類土器は、施文方法が一般的で時期幅が広い土器である。日向B期の分布圏で施文方法が似た土器が出土しているのは、松ヶ平A遺跡〔鈴鹿1984〕である。ここでは素山2a式（縄文条痕系土器群の前半期）以降とした分類（II群4類）に横走気味の縄文が見られる。また、岩下D遺跡〔松本1986〕、牡丹平遺跡〔山内1983〕でも少數出土している。2つの遺跡の報告書では、横走縄文の土器片を日向B期の土器と同分類に入れて報告しているが、詳細は明らかにされていない。I群3類土器は、日向B期の土器に少數ながら伴うらしいことまで知られている。しかし、鈴鹿氏の指摘にもあるように、併存関係の良好な資料が少ないためはっきりとは言えない現状がある〔鈴鹿1989〕。中ノ沢A遺跡〔本間ほか1989〕では、異方向捺糸文と縦走する縄文が施された2つの深鉢が、ひとつの住居跡から見つかっている。報告書では、出土の様子から同時に廻棄されたものとしている。また、塩喰岩陰遺跡〔芳賀1994〕において、日向B期の土器群と捺糸文の土器の出土も報告されている。

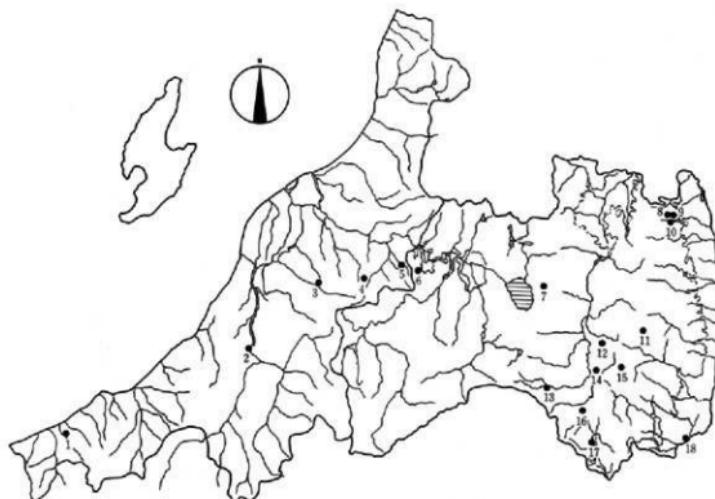
3 新潟県における出土例

本県では、日向B期およびそれに伴うと推測される土器の出土は、ほんの数例しか報告されていない。縦走する縄文の上に沈線を施すI群1類の土器は、東蒲原郡上川村の室谷洞窟〔中村1964〕、南蒲原郡下田村の八木鼻第二岩陰遺跡〔中村1972、三条商業社会科クラブ考古班1980〕、糸魚川市の岩野E遺跡〔高橋ほか1986〕で出土している。このうち岩野E遺跡では、土坑から興味深い深鉢が出土している。文様構成は横走縄文+口縁部沈線で、本遺跡出土のI群2類土器との関連もあり得る個体である。また、同遺跡では東海系の入海II式に比定される土器も出土している。このことは、日向B期を含めた新潟県の土器編年を考える上で重要なことである。I群3類土器は、小千谷市の堂付遺跡〔遠藤1995〕で出土している。掌握している出土例はこれすべてであるが、今後出土例が増えることが予想される。

県内全般の早期終末の土器様相は、不明瞭な点が多く残されているため、断片的にしかとらえることができない。特に、本県北半部や上越地方の海岸部は特徴的な資料が少ないと予想される。そうした意味で、本遺跡のI群土器は北半部の特徴的な資料となる。これを皮切りに、北半部の縄文条痕系土器の様相が明瞭になっていくことが期待される。



第17図 I群 2・3類土器と福島県出土土器



第18図 関連遺跡位置図

第10表 関連遺跡一覧

1	岩野 E 遺跡	8	岩下 D 遺跡	15	柳橋 A 遺跡
2	當付 遺跡	9	松ヶ平 A 遺跡	16	日向前 B 遺跡
3	八木鼻 第2 岩陰 遺跡	10	羽白 C 遺跡	17	南原 遺跡
4	室谷 洞窟	11	岡橋 遺跡	18	大烟貝塚
5	上小島 遺跡	12	牡丹平 遺跡		
6	塩喰岩陰 遺跡	13	泉州 遺跡		
7	中ノ沢 A 遺跡	14	源平 C 遺跡		

要 約

- 1 上小島遺跡は東蒲原郡上川村大字小出字上小島920番地ほかに所在する。遺跡は東小出川の南側の段丘面に位置し、常浪川と東小出川との合流点から南南東へ直線距離で約4.8km、標高約120mを測る。
- 2 発掘調査は磐越自動車道建設に伴い、平成7年4月12日～8月29日にかけて実施した。調査面積は6,100m²であった。
- 3 検出された石器・土器の多くは縄文時代早期終末のものであった。
- 4 遺物や遺構が集中していたのは、遺跡北側の段丘縁部であった。
- 5 石器は総計688点出土し、剥片類を除くと不定形石器が最も多くなり(82点)、石匙(10点)、箆状石器(9点)がこれに続く。
- 6 土器は総計543点出土した。時期別構成比は、新潟県で出土例が少ない早期最終末の土器が多くを占めた。これらの土器は福島県では日向B期と呼ばれる時期に所属し、多くは同県で出土している。今後これらは新潟県北半部の縄文条痕系土器の特徴的な資料となる。
- 7 遺構は、1基のフラスコ状土坑を含め8基検出された。すべて縄文時代早期終末に所属する可能性が高い。

引用・参考文献

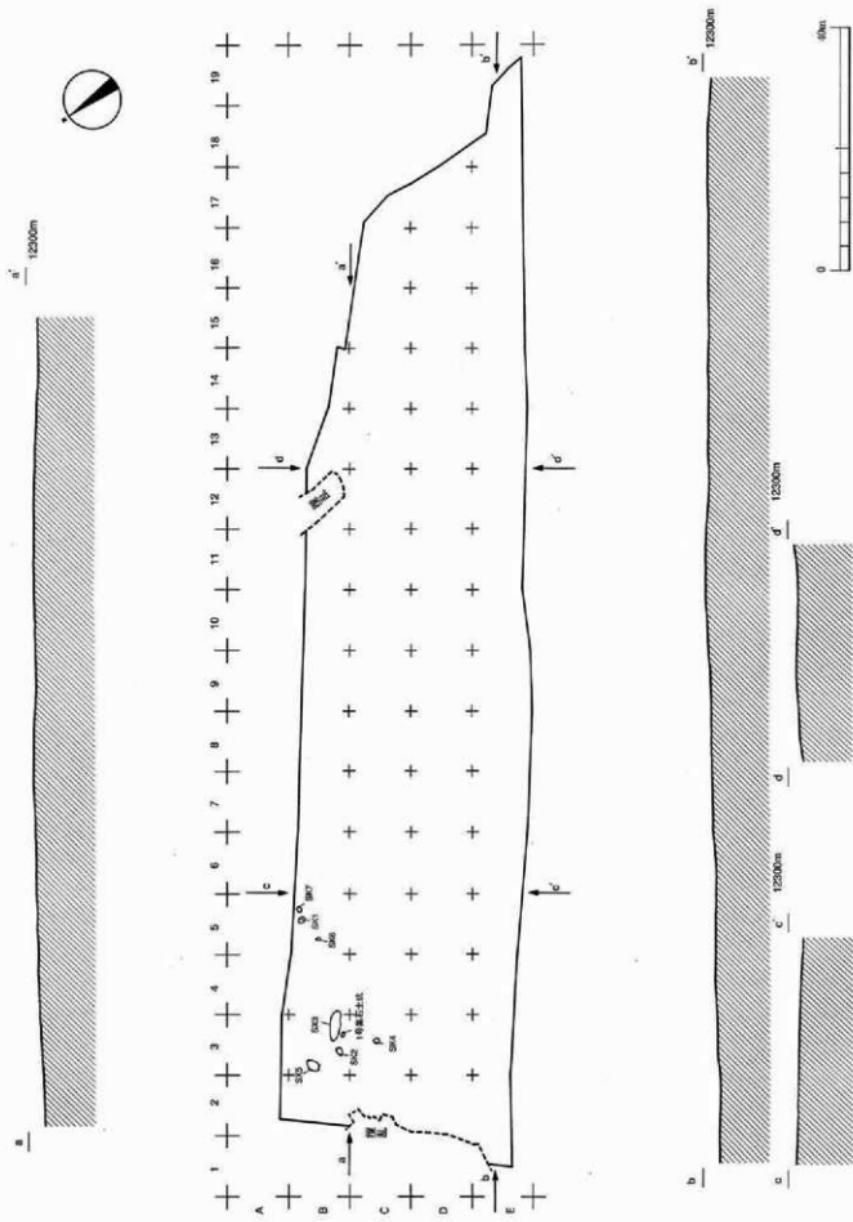
- ア 相原淳一 1985 「縄文条体土器群の諸段階について」「赤い本 片倉信光氏追悼論文集」 赤い本同人会
- 赤城源三郎ほか 1986 「東蒲原郡」「日本歴史地名大系第15巻 新潟県の地名」 平凡社
- イ 石原正徳・小熊博史 1988 「新潟県の研究動向」「第2回縄文セミナー 縄文早期の諸問題」 群馬県考古学研究所
- ニ 遠藤孝司 1995 「百塚東E遺跡・堂付遺跡」「年報 平成6年度」 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 遠藤 佐 1995 「大谷原遺跡発掘調査の概要—現地説明会資料—」 新潟県上川村教育委員会
- オ 小熊博史 1989 「縄文時代早期終末における絆条体圧文土器の土器の一様相」「信濃」 41-4 信濃史学会
- 小熊博史・北村 亮 1994 「新潟県における縄文早期末・前期初頭の土器様相」「第7回縄文セミナー早期終末・前期初頭の諸様相」 縄文セミナーの会
- 小野 昭 小熊博史 1987 「巻町布目遺跡の調査」「巻町史研究III」 新潟県巻町
- カ 加藤晋平・鶴丸俊明 1991 「石器入門辞典一先土器一」 柏書房
- キ 興野義一 1967 「大木式土器理解のために(I)」「考古学ジャーナル」 ニュー・サイエンス社
- 北村 亮ほか 1990 「岩原I 遺跡・上林塚遺跡」 新潟県教育委員会
- コ 胸形欲頭ほか 1987 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究(4)」「長岡市立博物館研究報告第22号」 新潟県長岡市立科学博物館
- サ 佐藤正知 1995 「蟹沢遺跡・上城遺跡」 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤典邦 1994 「福島県の早期終末から前期初頭の様相」「第7回縄文セミナー早期終末・前期初頭の諸様相」
- 沢田 敦 1994 「中峰遺跡・上ノ平遺跡C地点・吉ヶ沢遺跡B地点」「年報 平成5年度」 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 沢田 敦・飯坂盛泰ほか 1994 「上ノ平遺跡A地点」 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- ス 鈴鹿八重子 1980 「泉川遺跡」「福島県文化財調査報告書第80集 東北新幹線関連遺跡発掘調査報告I」 福島県教育委員会・日本国有鉄道
- 鈴鹿良一 1984 「松ヶ平A遺跡(第2次)」「福島県文化財調査報告書第129集 真野ダム関連遺跡発掘調査報告VI」 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター
- 鈴鹿良一 1989 「福島県の早期後半から前期初頭の土器群について」「東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について」 第4回縄文文化検討会
- 鈴木道之助 1991 「石器入門辞典一縄文一」 柏書房
- セ 関 雅之ほか 1986 「能論」「日本歴史地名大系第15巻 新潟県の地名」 平凡社
- 先崎忠衛 1985 「岡橋遺跡」「滝根町遺跡分布調査報告3」 福島県滝根町教育委員会
- タ 高橋信一 1983 「柳橋A遺跡」「福島県文化財調査報告書第113集 武隈地区遺跡分布調査報告(III)」 福島県教育委員会
- 高橋 保・高橋保雄ほか 1992 「五丁歩遺跡・十二木遺跡」 新潟県教育委員会
- 高橋 保ほか 1986 「中原遺跡・岩野A遺跡・岩野E」「新潟県教育委員会
- 高橋保雄 1995 「東蒲原郡上川村北野遺跡の調査概要」「(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団研究紀要 1995」 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 浅沢規朗ほか 1995 「大坂上遺跡・猿類遺跡・中畠遺跡・牧ノ沢遺跡」「新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- ツ 塙本節也ほか 1988 「斐島脇遺跡」「栃木県埋蔵文化財報告第93集一国道294号線改良工事に伴う発掘調査報告一」 栃木県教育委員会

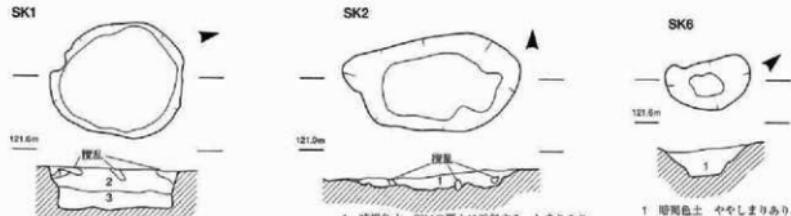
- ナ 中村孝三郎 1960 「長岡市立科学博物館調査研究報告3 小瀬ヶ沢洞窟」 新潟県長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎 1962 「室谷洞窟」『新潟県文化財年報第4 阿賀一東蒲原郡学術総合調査報告書一』 新潟県教育委員会
- 中村孝三郎 1964 「長岡市立科学博物館調査研究報告6 室谷洞窟」 新潟県長岡市立科学博物館
- 中村五郎 1983 「東北地方南部の縄文早期後半の土器編年試論」『福島考古24号』 福島県考古学会
- ニ 新潟県 1986 「新潟県史 通史編1 原始・古代」
- ハ 芳賀英一 1980 「源平C遺跡」『福島県文化財調査報告書第84集 国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査報告IV』 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター
- 芳賀英一 1994 「塩喰岩陰遺跡」『福島県文化財調査報告書第296集 東北横断自動車道遺跡調査報告25』 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・日本道路公団
- フ 福島県 1964 「福島県史第6巻 資料編1」 福島県教育委員会
- 藤巻正信ほか 1991 「城之腰遺跡」新潟県教育委員会
- 藤巻正信ほか 1996 「吉ヶ沢遺跡A地点・上ノ平遺跡B地点・中峰遺跡」 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- ホ 本間 宏ほか 1989 「福島県文化財調査報告第218集 東北横断自動車道遺跡調査報告4 中ノ沢A遺跡」 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・日本道路公団
- 本間嘉靖ほか 1962 「東蒲原郡内の考古学的調査」『新潟県文化財年報第4 阿賀一東蒲原郡学術総合調査報告書一』 新潟県教育委員会
- マ 松本 茂 1986 「岩下D遺跡」『福島県文化財調査報告書第165集 真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅳ』 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター
- 松本 茂 1989 「羽白C遺跡(第2次)」『福島県文化財調査報告書第210集 真野ダム関連遺跡発掘調査報告XIII』 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・福島県土木部
- 馬目順一・原川雄二・山内幹夫 1975 「大畑貝塚調査報告」 福島県いわき市教育委員会
- ミ 南 雄二 1995 「北野遺跡」「年報 平成6年度」 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- ヤ 山内幹夫 1983 「阿武隈山地を中心とした縄文前期初頭土器編年について」「しのぶ考古8」 山内幹夫 1983 「牡丹平遺跡」『福島県文化財調査報告書第113集 阿武隈地区遺跡分布調査報告(III)』 福島県教育委員会
- 山内清男 1979 「日本先史土器の縄紋」 先史考古学会

図 版

凡 例

- 1 ここに主な遺構・遺物の実測図と写真をおさめる。
- 2 遺構は、土坑（S K）、集石土坑、性格不明遺構（S X）で分類した。
- 3 遺物は一連番号を付し、図面・写真もこれにしたがった。
- 4 実測図・写真の縮尺は各図版に示した。

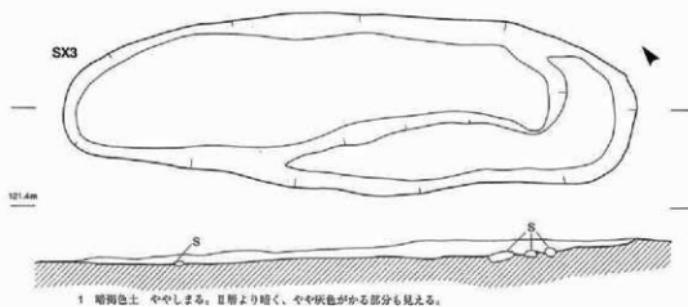




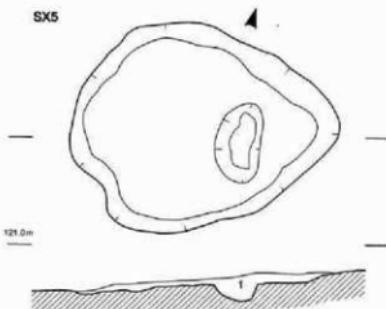
1 暗褐色土 SK4の覆土に近似する。しまりあり。

1 暗褐色土 ややしまりあり。
多量の炭化粒、少量の赤土粒を含む。

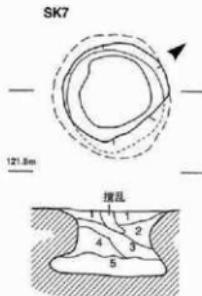
- 1 黄褐色土 粘土性やあり、よくしまる。
- 2 暗褐色土 粘土性やあり、よくしまる。
- 3 暗褐色土 (2層より暗い) 粘土性やあり、よくしまる。
2、3層は小塊や黄褐色泥岩が多くまざる。



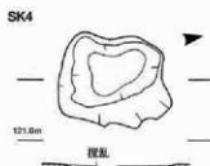
1 暗褐色土 ややしまる。II層より細く、やや灰色がかる部分も見える。



1 暗褐色土 黄褐色砂を少量含む。理を多く含む。



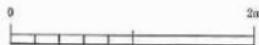
1 暗褐色土 よくしまる。
2 暗褐色土 (1層より明るい) よくしまる。
3 暗褐色土 (1層と同じ明るさ) よくしまる。
4 暗褐色土 (1層より暗い) よくしまる。
5 暗褐色土に黄褐色砂が少量まざる。理が少量出土。

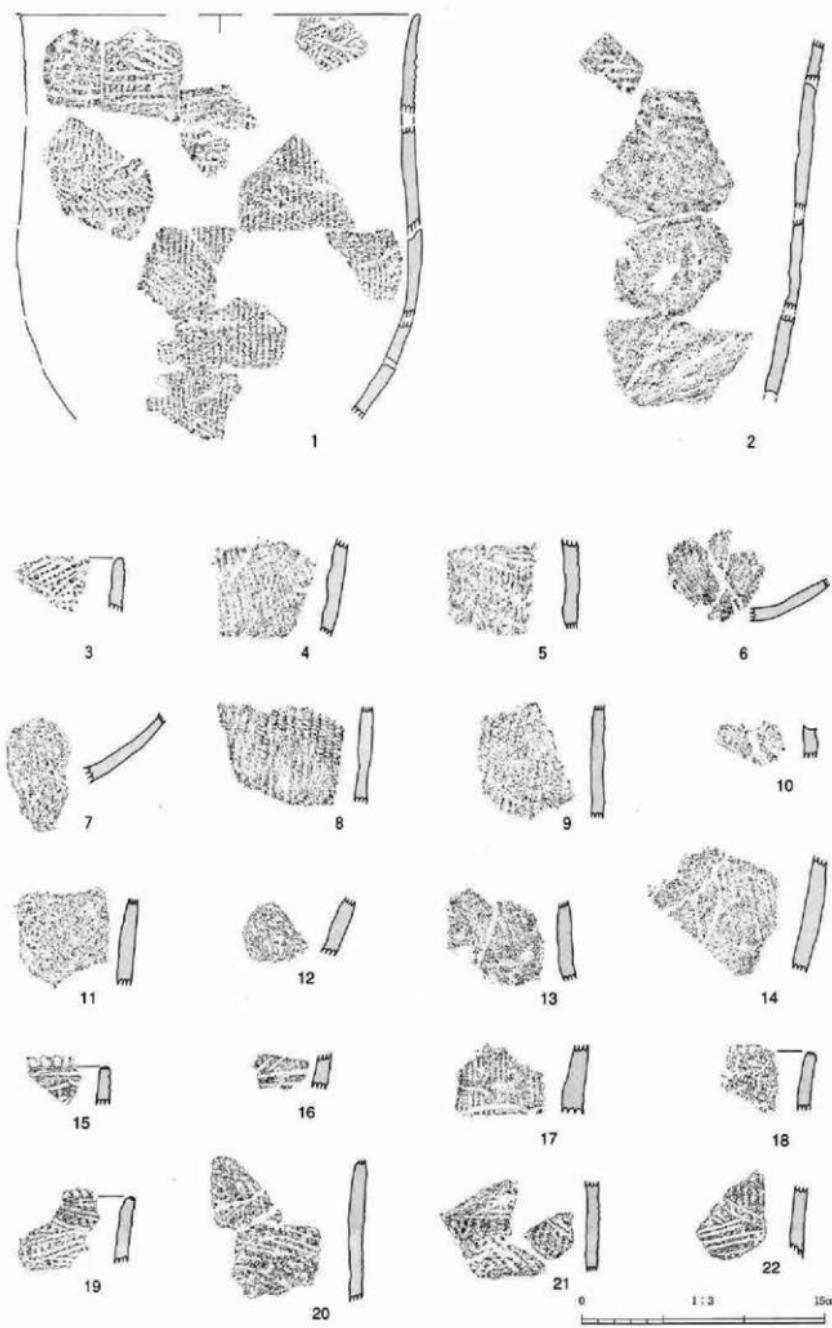


1 暗褐色土 SK2の覆土に近似する。
ややしまる。

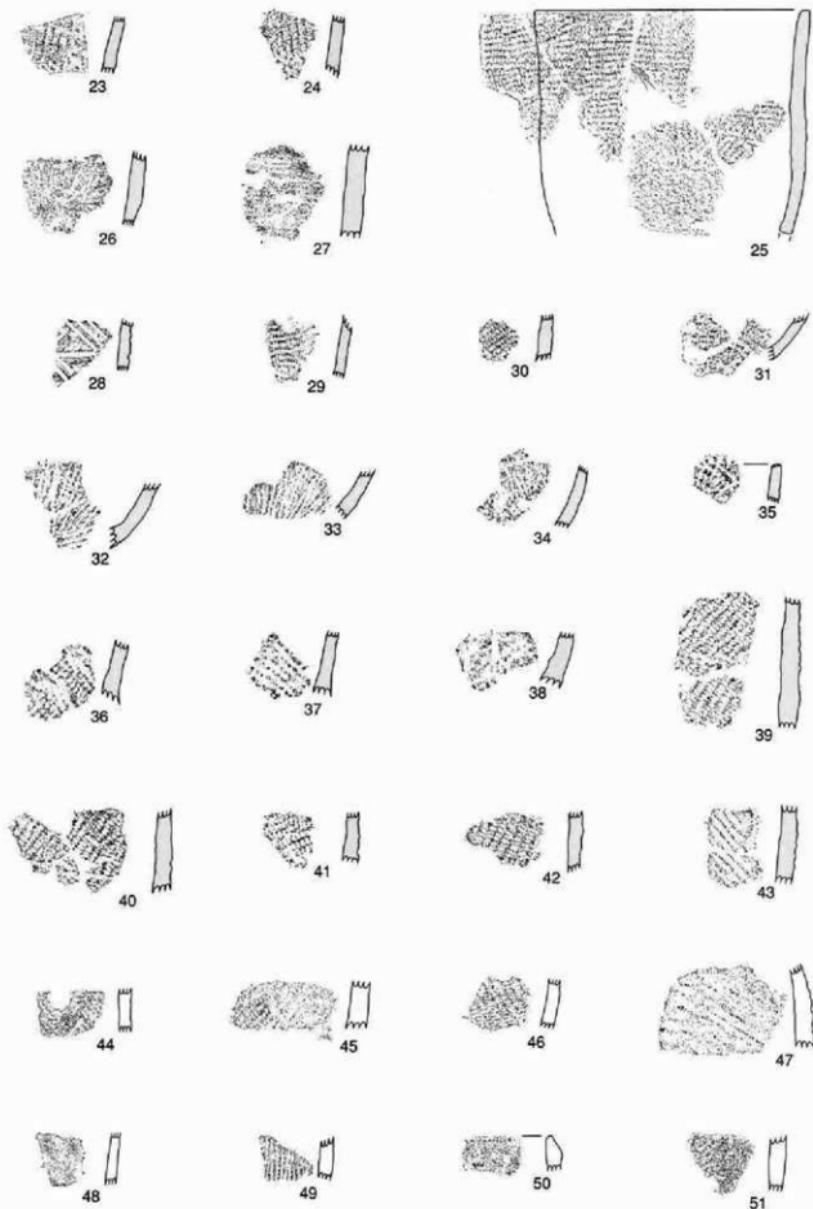


1 暗褐色土 粘性をややもつ。
2 暗褐色土に明褐色土(シルト質)
の地山がブロック状に入る。粘性をもつ。

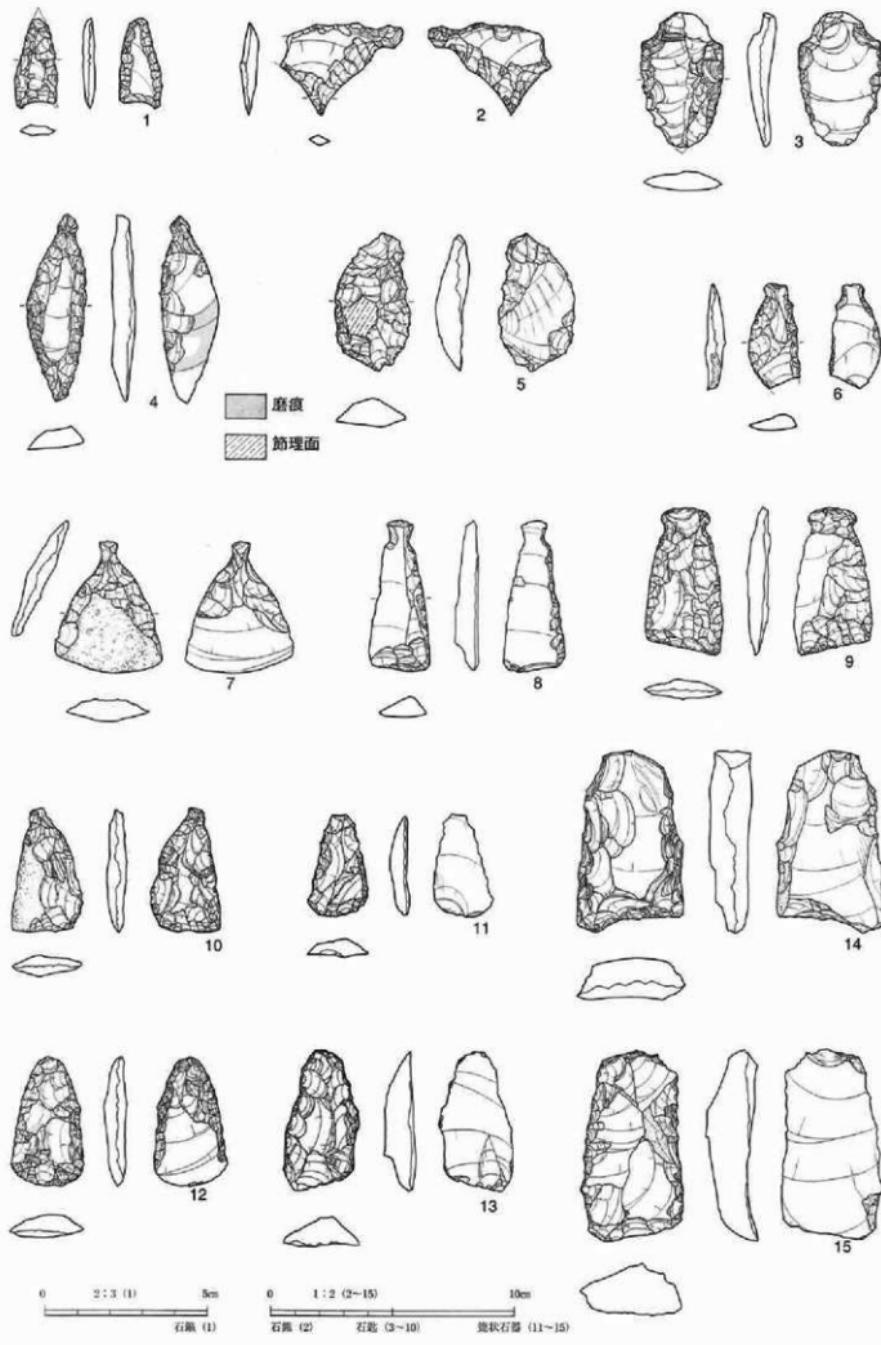




1 : 3
15cm



0 1:3 15cm





16



17



18



19



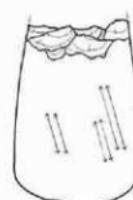
20



21



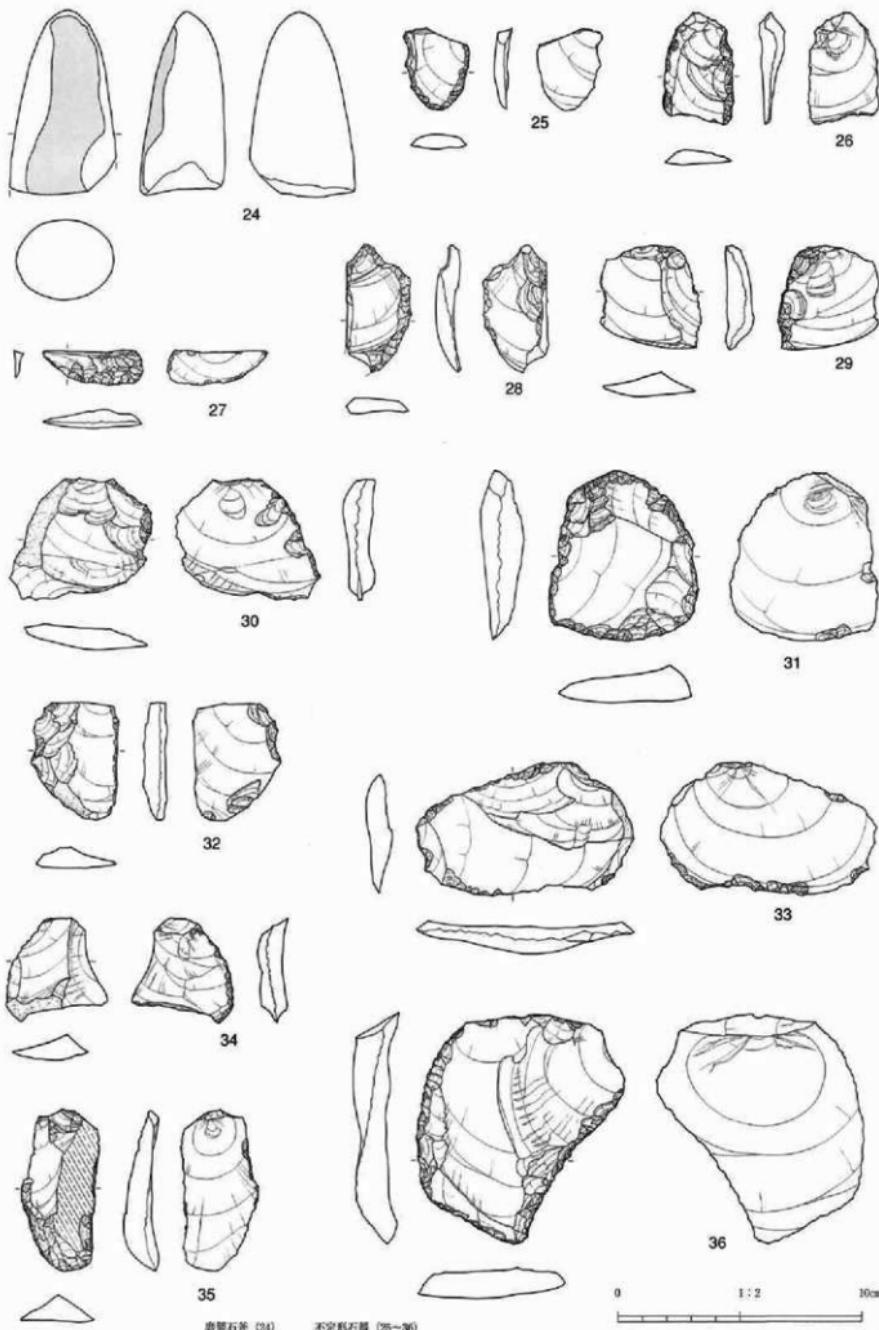
22



23

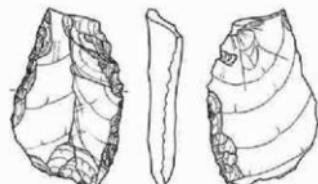


抛状石器 (16~19) 打製石斧 (20~21) 磨製石斧 (22~23)

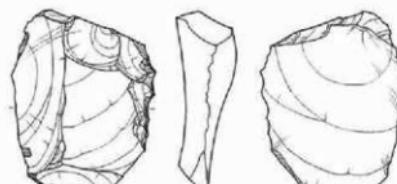


磨製石斧 (34)

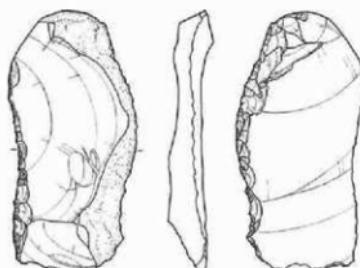
不定形石器 (25-36)



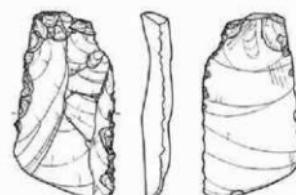
37



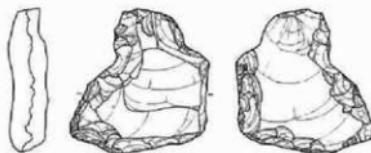
38



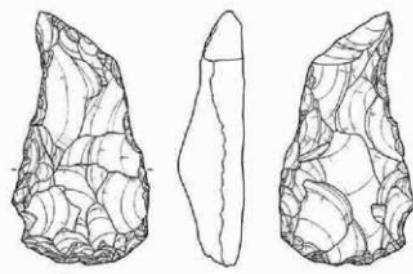
39



40



41



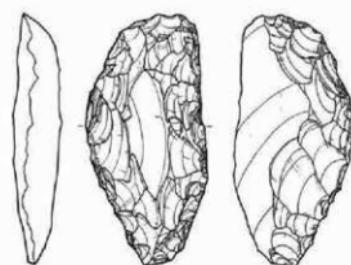
43



42



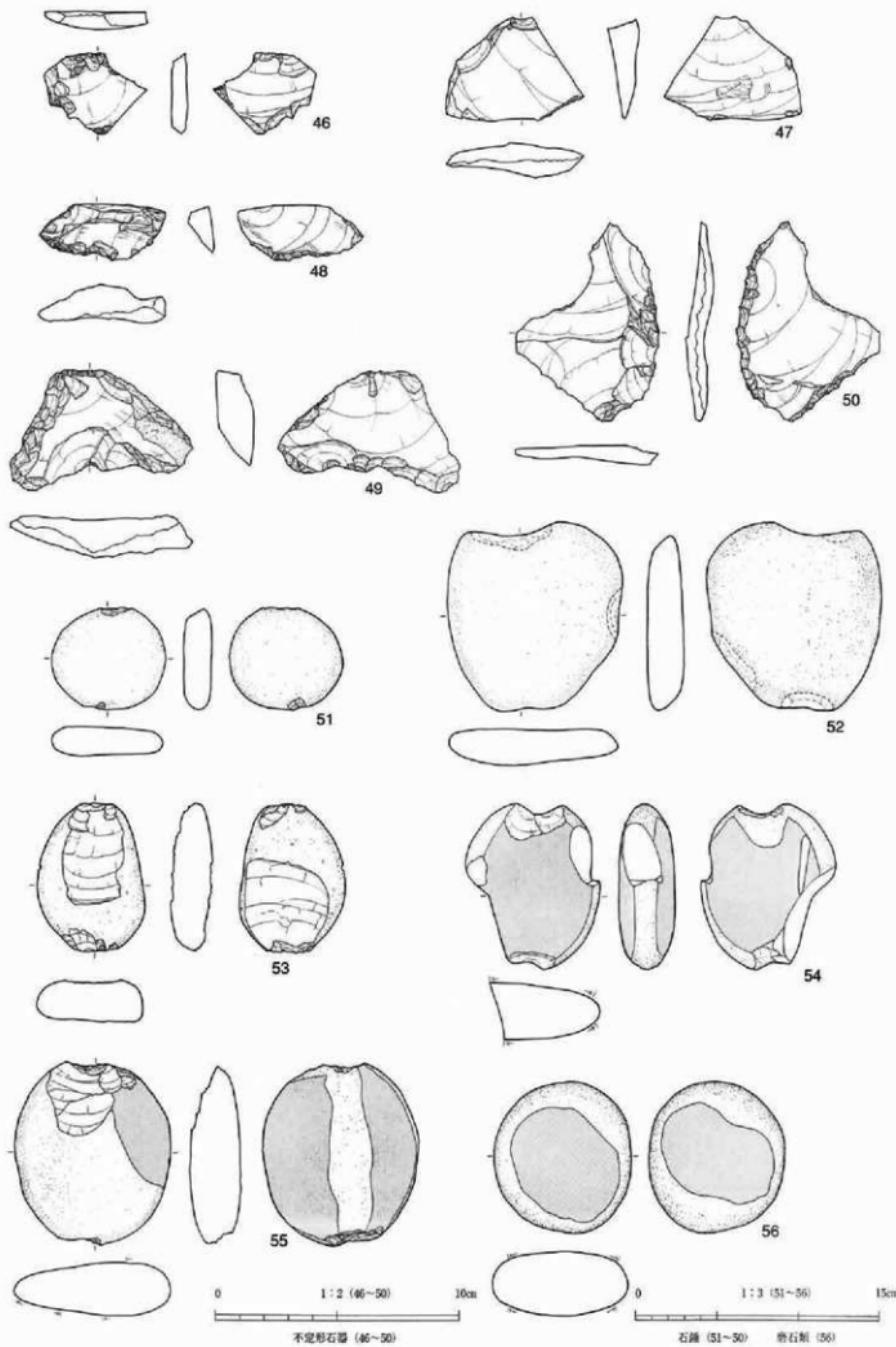
44

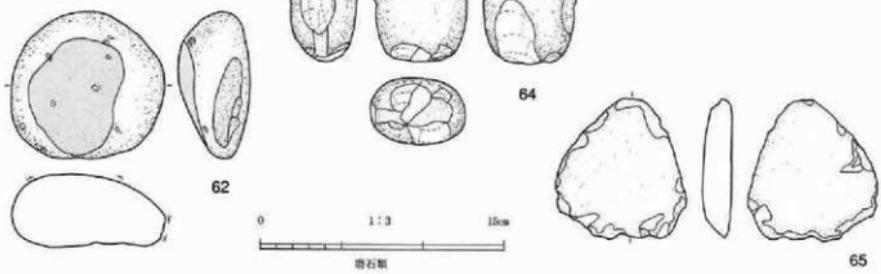
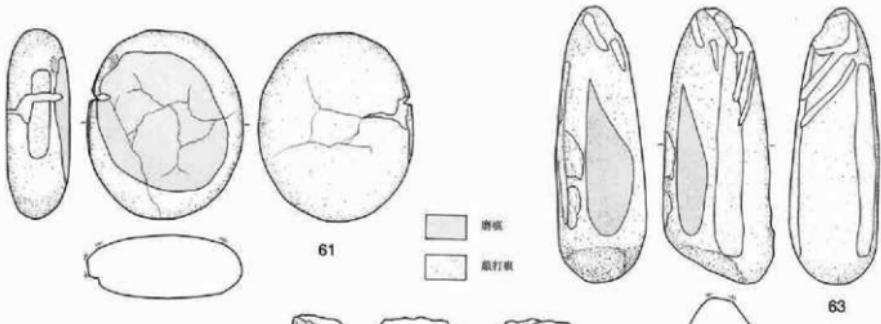
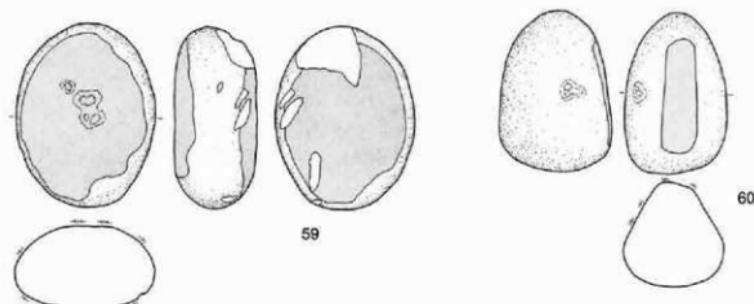
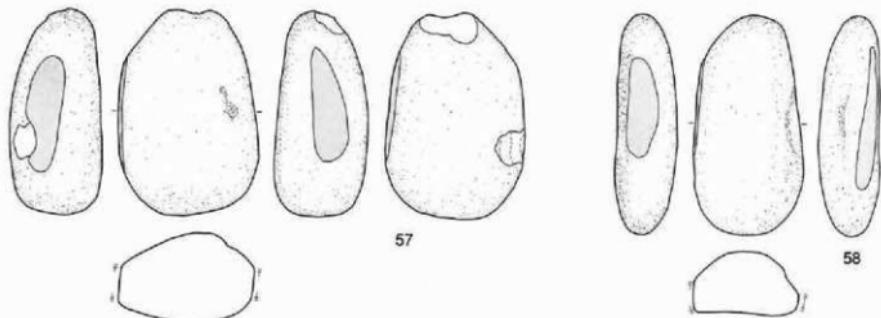


45

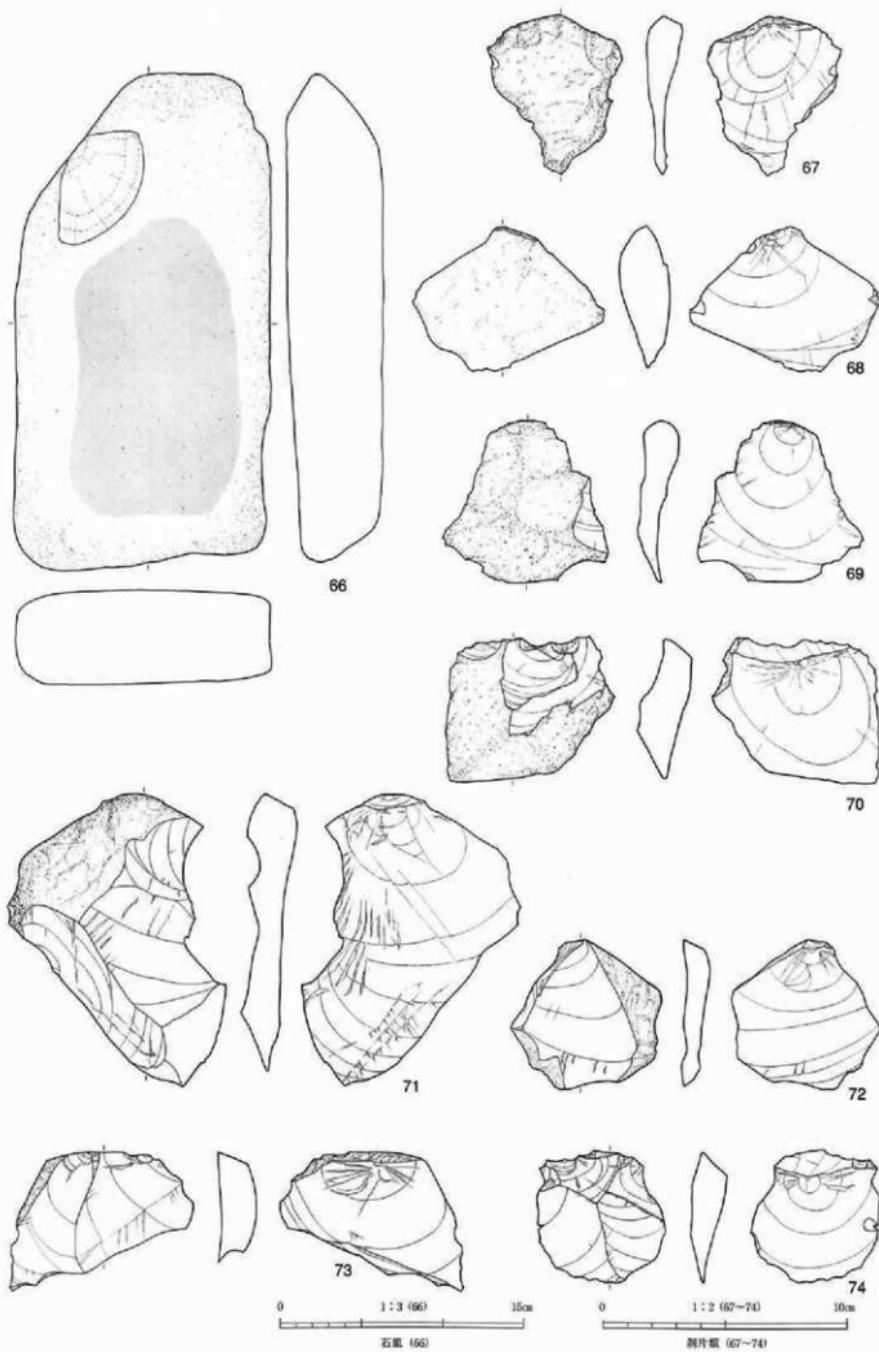


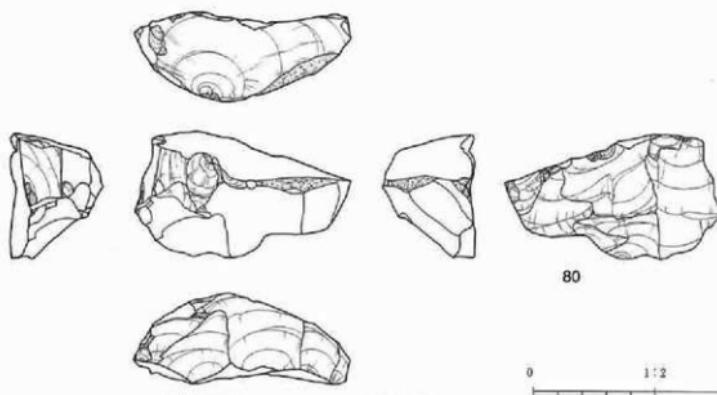
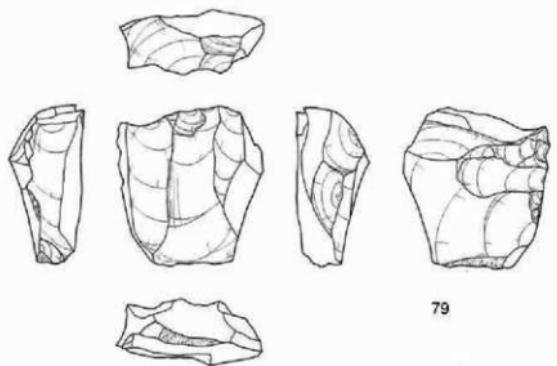
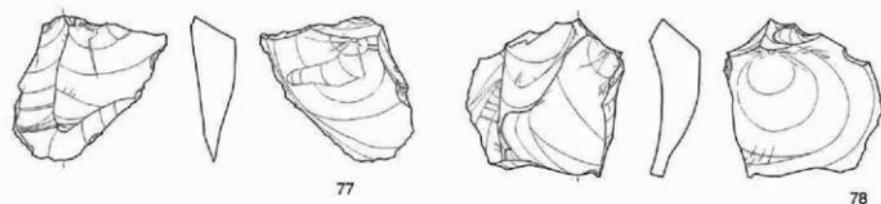
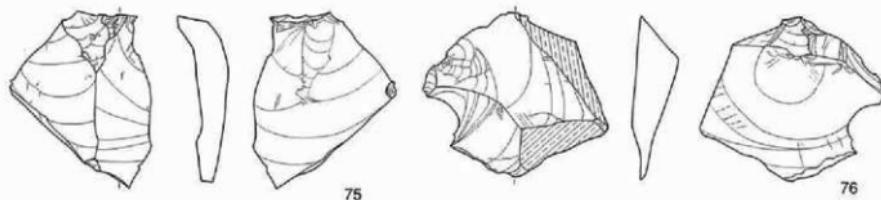
0 1:2 10cm





0 1:3 15cm
磨石類

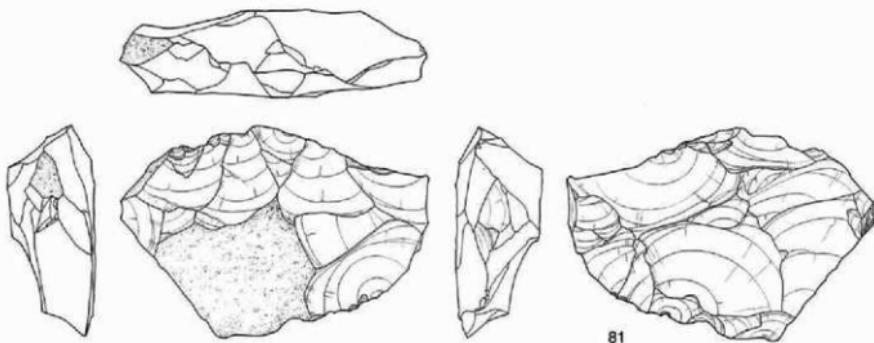




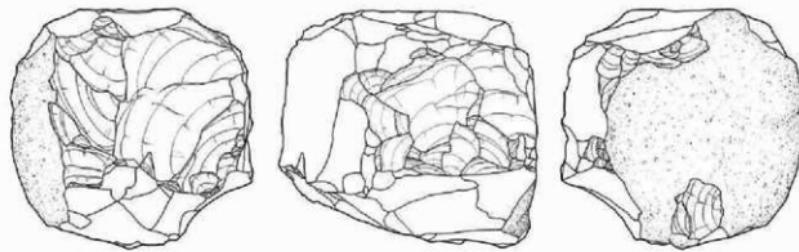
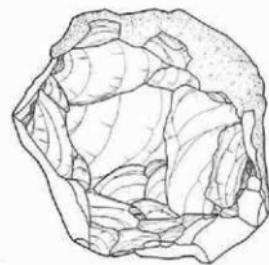
剥片類 (75-78)

石核 (79-80)

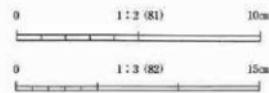
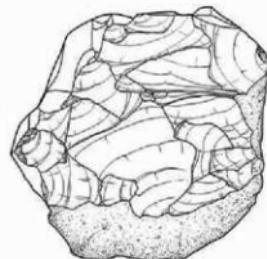
0 1:2 10cm



81



82





1. 遺跡遠景
(上空から)



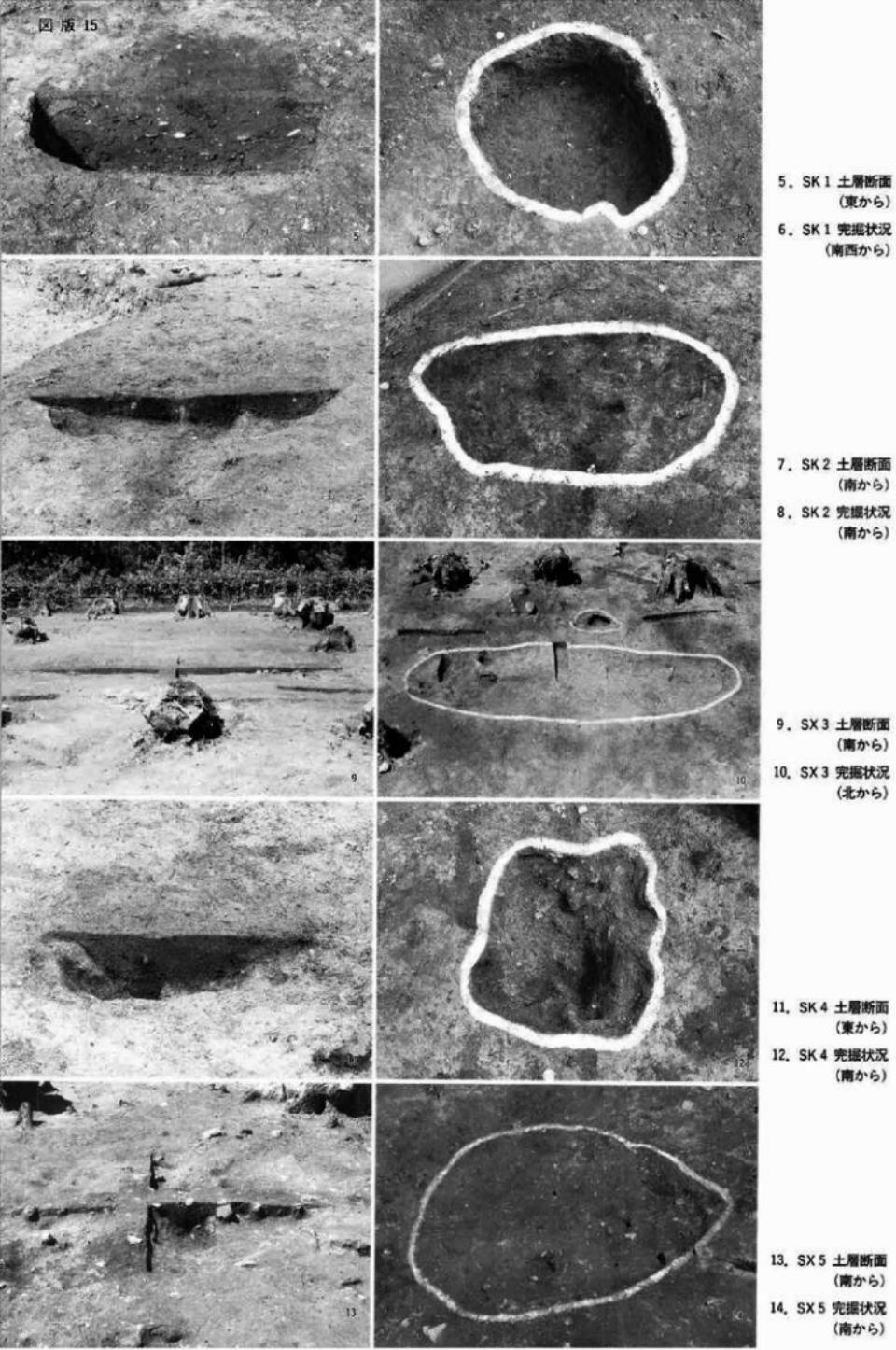
2. 遺跡全景
(上空から)

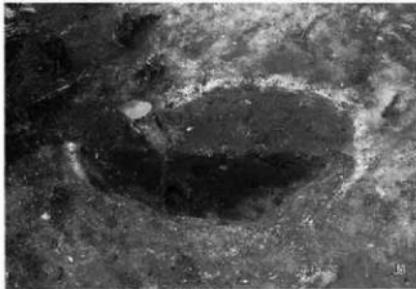


3. 遺物出土状況
(南から)



4. 基本層序
(北西から)





15. SK 6 土層断面
(東から)

16. SK 6 完掘状況
(東から)



17. SK 7 土層断面
(東から)

18. SK 7 完掘状況
(南から)



19. 1号集石土坑検出状況
(南西から)

20. 1号集石土坑土層断面
(南西から)



21. 遺跡完掘状況
(上空から)

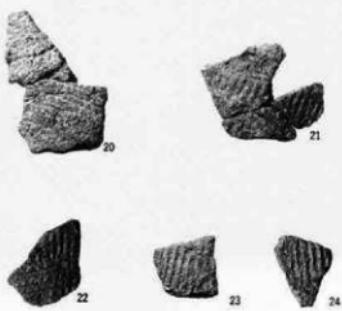
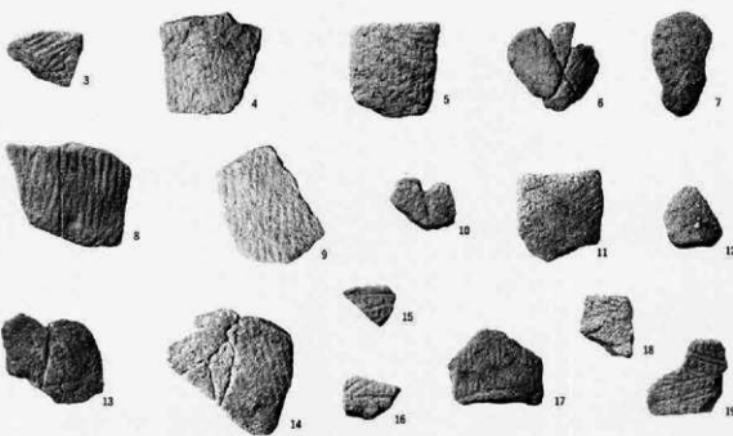




1



2



1群1類(1~24)

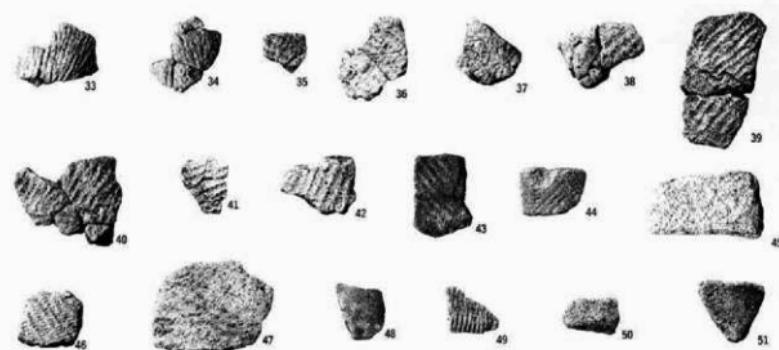
1群1類(25)

1 : 3

I群 1類(26~28)
2類(29~31)
3類(32~34)



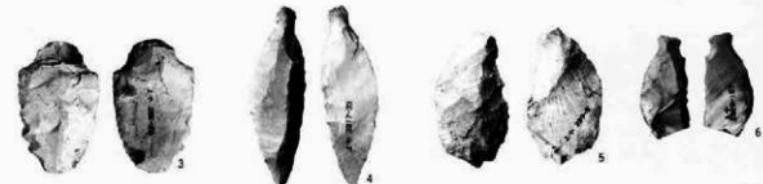
II群 1類(35~42)
2類(43)
III群(44~51)



石锥(1)
2 : 3



石锥(2)
1 : 2



石锥(3~10)
1 : 2



amatō 石器(11~14)
1 : 2



磨狀石器(15~19)



打製石斧(20~21)

1 : 2

磨製石斧(22~24)

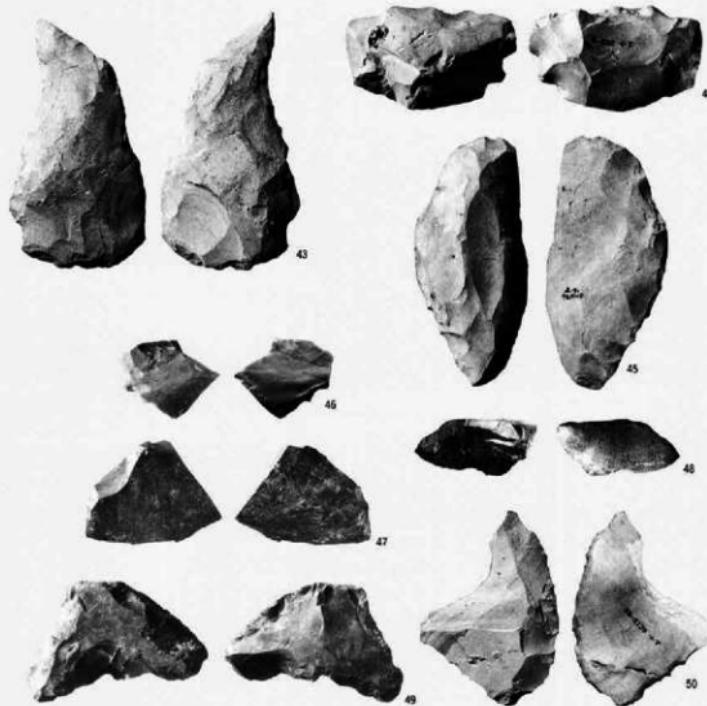
1 : 2



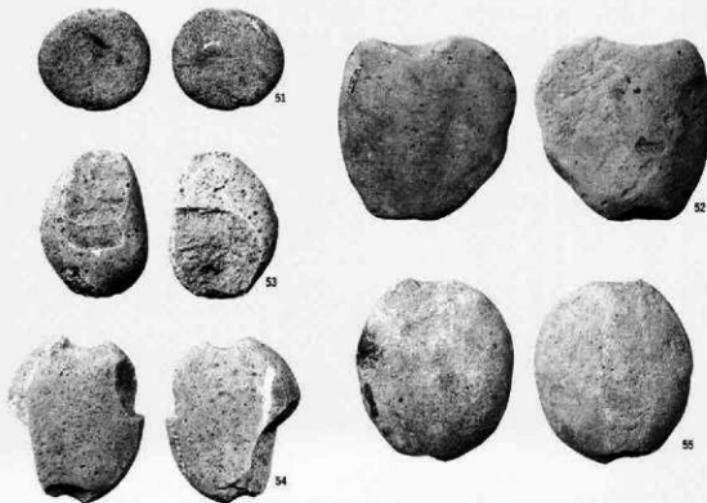
不定形石器
(25~42)
1 : 2



不定形石器
(43~50)
1 : 2



石錘(51~55)
1 : 3



磨石類(56~65)

1 : 3

石皿(66)

1 : 3

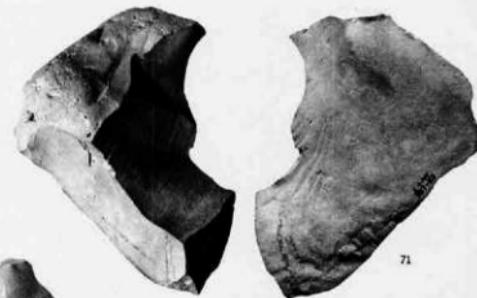


剥片類(57~76)

1 : 2



70



71



72



73



74



75

側片類(77・78)

1 : 2

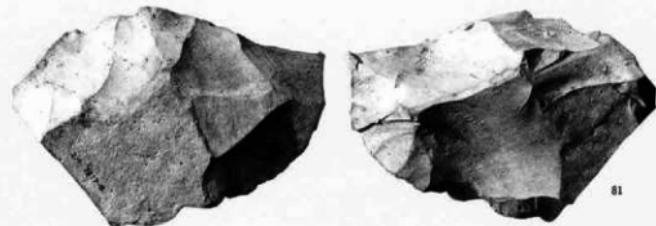


石核(79~81)

1 : 2

(82)

1 : 3



報告書抄録

書名	上小島遺跡							
副書名	磐越自動車道関係発掘調査報告書							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第81集							
編・著者名	南雄二・内山徹・島田昌幸							
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956 新津市大字金津93番地1 TEL0250-25-3981							
発行年月日	1996年11月30日							
所収遺跡	所 在 地	コ ー ド		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上小島遺跡	新潟県 東蒲原郡上川村 大字小出字上小島	15-383	39	37度 37分 07秒	139度 30分 04秒	19950412- 19950829	6,100m ²	磐越自動車道建設
遺 跡 名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物			特記事項	
上小島遺跡	遺物包含地	縄文時代早期	フラコ状土坑1基、 土坑4基、集石土坑1基	繩文土器、石器（打製・磨製石斧、第 状石器、石匙、不定形石器、剣片他）				

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第81集

磐越自動車道関係発掘調査報告書

上小島遺跡

平成8年11月30日印刷
平成8年11月30日発行新潟県教育委員会
新潟県埋蔵文化財調査事業団
新潟市大字金津93番地1
電話 0250(25)3981

印 刷

純第一印刷所

新潟市和合町2丁目4番18番
電話 025(285)7161